

隅田川等における未来に向けた水辺整備のあり方

～水辺のゆとり・うるおい・にぎわいをつなぐ～

未来の東京に向けた水辺整備のあり方検討会
2023年6月

はじめに

「未来の隅田川」に向けて

隅田川等の水辺空間では、下流域を中心に水辺と街の連続性・回遊性を高め、水辺のにぎわいを生む取組が進んできた。

これまでの取組やポストコロナを見据えた社会情勢の変化等を踏まえ、水辺のオープンスペースが持つ『ゆとりと潤い』を活かした今後の水辺整備のあり方についてまとめた。

隅田川等における未来に向けた水辺整備のあり方 目次

はじめに	1
第1章「隅田川等における未来に向けた水辺整備のあり方」の考え方	3
1. 背景と経緯	4
2. 東京の水辺を取り巻く状況	7
3. 東京の水辺が目指すべき方向性	11
第2章 隅田川等における水辺整備に関する今後の方向性	14
1. これまでの取組の振り返り	15
2. これからの水辺整備に向けた課題とポイント	22
3. 隅田川等の水辺整備に関する方向性	23
第3章 『水辺のゆとりと潤いを活かした東京の顔づくり』による取組	24
1. 水辺を基軸としたネットワークの構築	25
2. 取組の体系	26
3. 取組イメージ	27
4. 拠点ごとの取組イメージ	37
第4章 今後の展開に向けて	46
1. 今後の展開に向けた考え方	47
2. 段階的な発展に向けての取組	49

第1章

「隅田川等における未来に向けた水辺整備のあり方」の考え方

1. 背景と経緯

「隅田川等の水辺整備のあり方」検討の背景と経緯

2. 東京の水辺を取り巻く状況

- (1) 全国的に進む河川空間のオープン化
- (2) ポストコロナを見据えた水辺空間への期待
- (3) 防災意識の高まりと利活用の関わり
- (4) 他都市における様々な利活用の事例

3. 東京の水辺が目指すべき方向性

- (1) 「未来の東京」が目指すビジョンと戦略
- (2) 隅田川を中心とした水辺をモデルとした検討
- (3) 今後のあり方の検討範囲
- (4) 今後のあり方の位置付け

第1章の概要

- 2014年から展開している隅田川を中心とした「**水辺の魅力を活かした東京の顔づくり**」から、およそ10年が過ぎようとしている。その間、民間事業者が河川敷地でオープンカフェを運営等する河川空間のオープン化が全国的に進展した。
- また、ポストコロナを見据えた都市づくりや激甚化する災害への意識の高まり等の東京の**水辺を取り巻く状況は大きく変化**しており、**今後のあり方を考える時期**が来ている。
- そのため、東京の将来像を描いた「未来の東京」戦略に基づき、**ゆとりと潤いにあふれる水辺空間の整備**を進めていくための方向性について、専門家や関係機関等の意見を**今後の「あり方」としてとりまとめるものとする**。
- 今回の検討の対象範囲は、東京を代表する河川である隅田川を中心とした水辺空間とし、**河川整備だけではなく沿川のまちづくり**を含めたものとしている。
- この「あり方」は、国・都・区等の行政や地域や民間事業者等の**それぞれの主体的な取組にフィードバック**していくための方向性を示すものである。

1. 背景と経緯

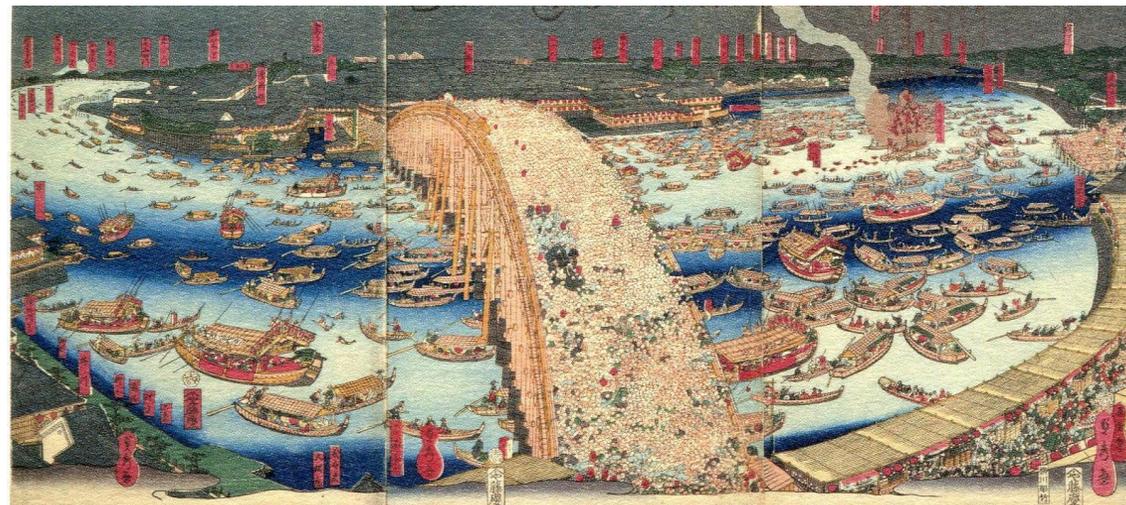
「隅田川等の水辺整備のあり方」検討の背景と経緯

- かつて、隅田川を中心とした水辺空間は、東京の東部低地帯を縦横に流れる河川や運河で構成され、水の都と呼ばれていた。とりわけ江戸時代には隅田川を軸とした水運による経済活動の基盤であった。
- 1960年代、それまでの都市の産業化に伴う水質の悪化に加え、地下水のくみ上げに起因する地盤沈下により高潮や洪水等の危険性が増し、都市を守るための防潮堤や水門等の整備によって、水害への安全性を高めた一方で人々の水辺への関わりは薄れていった。
- 1980年代、下水道整備等による水質改善と合わせてコンクリートによる直立の防潮堤を改築し、盛土による堤防を整備するスーパー堤防やテラス等の整備を進め、再び水辺と街がつながり始めてきた。
- 2014年に示した「隅田川等における新たな水辺整備のあり方」では、人々が集い、にぎわいが生まれる水辺空間の創出を促進するための方向性を掲げ、これまでに隅田川下流域を中心に「水辺の魅力を活かした東京の顔づくり」の取組を展開してきた。

今後のあり方へのポイント

- 2020年代となった今、これまでの取組を踏まえた新たなエリアへの展開やコロナ禍による大きな社会変化への対応等の新たなニーズを捉え、都市の貴重なオープンスペースである**隅田川等の水辺整備のあり方**について、**今後の方向性**を示していく必要がある。

<かつての隅田川における水辺のにぎわいの様子>



橋本貞秀「東都両国ばし夏景色」※東京都江戸東京博物館所蔵

<都市の貴重なオープンスペースとしてとしての隅田川>



大川端地区



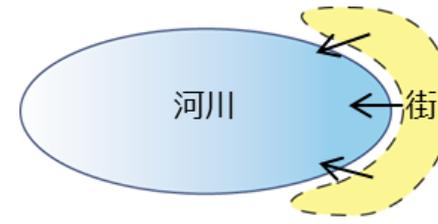
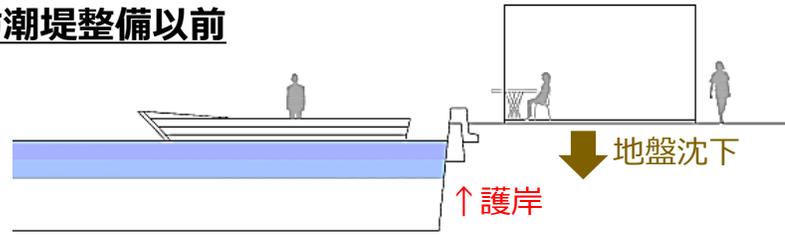
白鬚西地区

隅田川の水辺整備の経緯



※台東区立下町風俗資料館所蔵

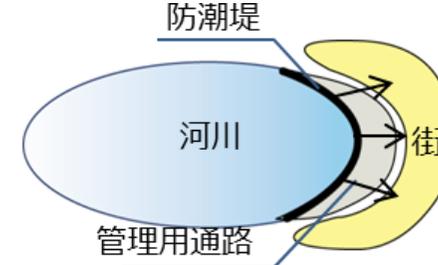
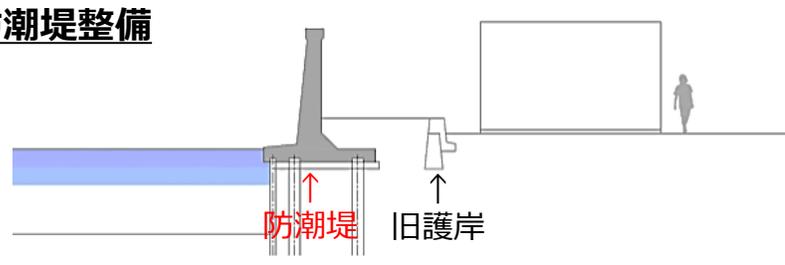
防潮堤整備以前



- ・川を生業とした生活・文化
- ・河岸、倉庫、料亭等
- ・地盤沈下による水害リスク増加



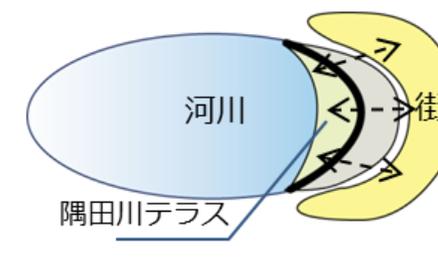
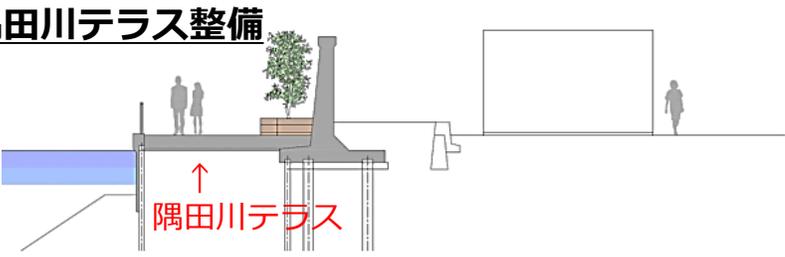
防潮堤整備



- ・水害から守る防潮堤を整備
- ・都市の発展に伴う水質汚濁
- ・水辺から街が離れていく



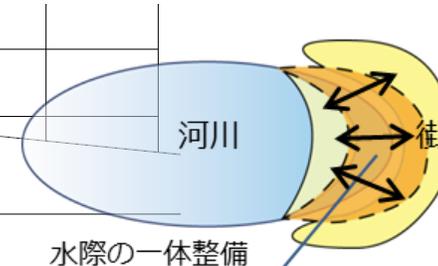
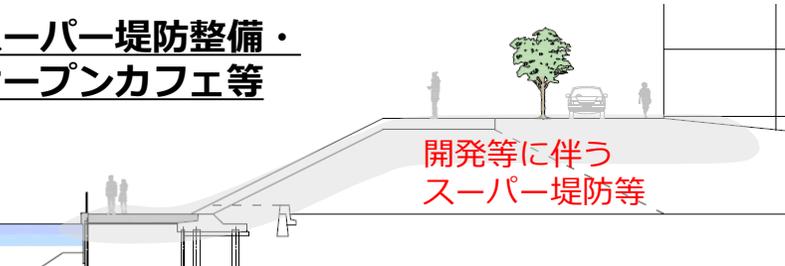
隅田川テラス整備



- ・護岸強化としてのテラス整備
- ・水質改善、親水性向上
- ・水辺への人の回帰



スーパー堤防整備・オープンカフェ等



- ・開発等に伴うスーパー堤防整備
- ・水辺のオープンカフェ等
- ・水辺と街のつながりが生まれる

「隅田川等の水辺整備のあり方」検討の経緯

1. 2014年「隅田川等における新たな水辺整備のあり方」から9年が経過し、隅田川下流域を中心に事業が進む
2. 大きな社会変革の中、水辺のオープン空間が持つ「ゆとりと潤い」が新たなニーズとなっている
3. これからの10年、その先の「未来の東京」に向けて、今後のあり方を示す時期になっている



隅田川下流域を中心とした事業展開（水辺の魅力を活かした東京の顔づくり）



テラス照明（厩橋上流）



テラス連絡橋



両国リバーセンター



北十間川プロムナード

※これまでの取組内容は後頁に記載

「未来の東京」に向けた水辺空間



どうあるべき？

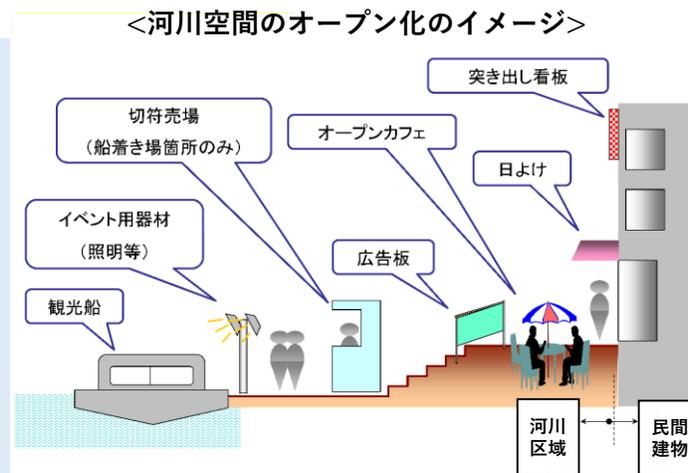
2. 東京の水辺を取り巻く状況

(1) 全国的に進む河川空間のオープン化

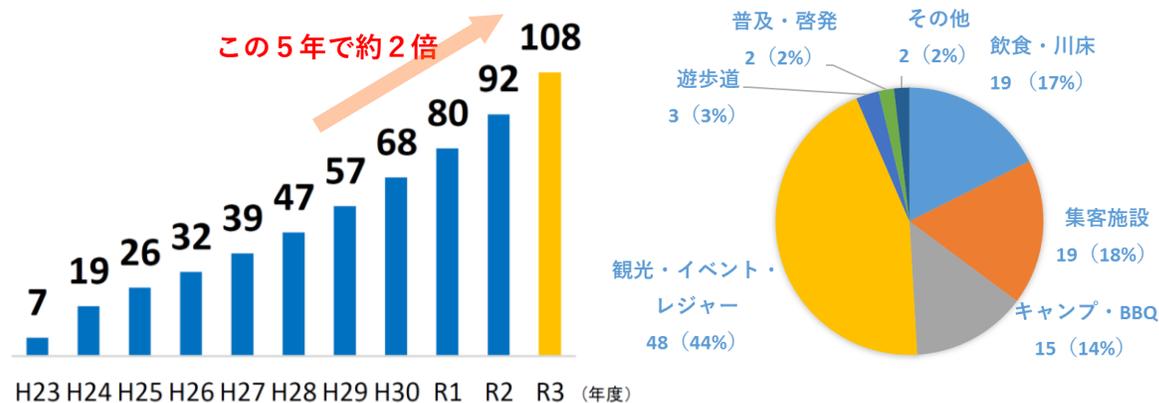
- これまで、河川敷地の占用主体は原則として公共性・公益性を有する者としてきたが、2011年度に河川敷地占用許可準則が改正され、地域合意等の一定の要件を満たす場合に河川敷地においても民間事業者によるオープンカフェの運営等が可能となった。
- 2016年度には、これらの運営が安定的に行えるよう、民間事業者等への占用許可期間を3年以内から10年以内へと延長されている。
- これらの制度を活用した取組を『河川空間のオープン化』と呼び、日本全国で河川空間の利活用が進められている。活用実績数は、この5年で2倍に増加しており、地域の特性にあわせた多様な活用が行われている。
- 東京においても、オープンカフェや川床（かわてらす®）等のこれまでの活用方法に加え、人道橋や栈橋等の多様な活用が行われ、地域の特性を活かした水辺空間の活用が進んでいる。

今後のあり方へのポイント

- 全国で河川空間のオープン化は進んでおり、隅田川をはじめとした東京の河川においても、都市の貴重なオープンスペースとしての水辺空間の活用を一層促進することが求められている。



<全国の河川空間のオープン化活用実績数及び主な活用方法>



令和4年 河川空間のオープン化事例集 (国土交通省 水管理・国土保全局) より作成

2. 東京の水辺を取り巻く状況

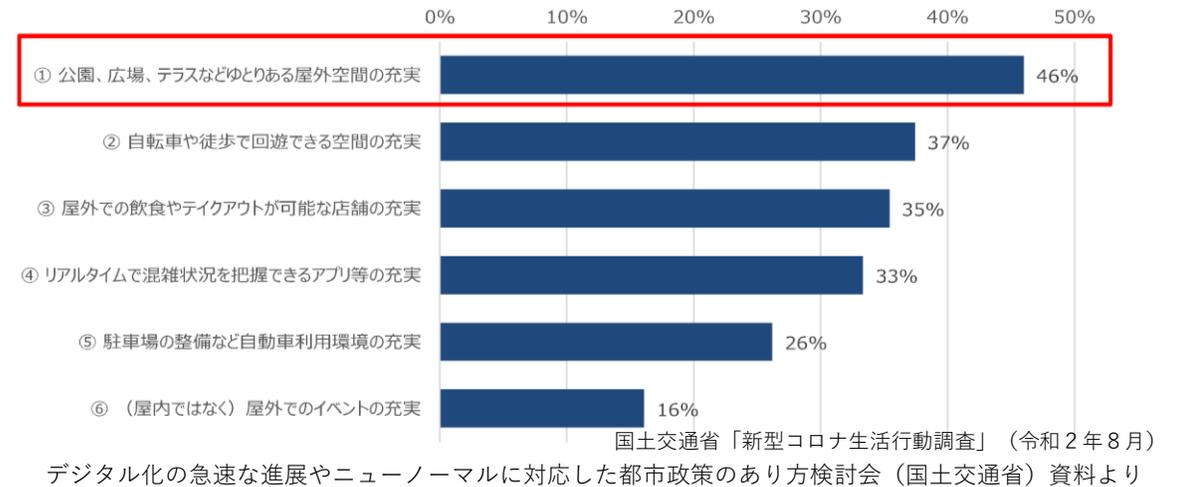
(2) ポストコロナを見据えた水辺空間への期待

- 新型コロナウイルス感染症の流行を契機として、ソーシャルディスタンスの確保や密の回避、テレワークの利用拡大や多様な移動手段の活用など、**人々の意識や行動に変化**が生じている。
- 生活様式の変化に伴い、身近な自然環境やオープンスペースの重要性が再確認され、ゆとりある**屋外空間の充実**、自転車や徒歩等の**回遊空間の充実**へのニーズが高まっている。
- 社会基盤を整備するだけでなく、**使いこなす文化を育成**していくことも重要であり、屋外公共空間を人々の活動の場として活用する社会実験等が各地で行われている。
- 水辺空間においても、これまでの洪水や高潮等の災害への安全性に加えて、散歩やジョギング、カフェでのくつろぎの場等の人々の生活の質を高める「**ゆとりや居心地の良さ**」の必要性を感じている。

今後のあり方へのポイント

- コロナ禍において人々の意識や行動が変化の中で、**水辺のオープンスペースへの新たなニーズやポテンシャル**を活かしていくことが求められている。

<都市空間に対する意識（充実してほしい空間）>

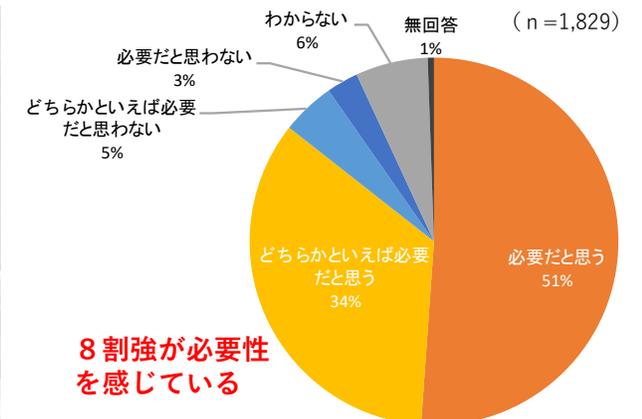


<屋外公共空間を活用する社会実験>



丸の内ストリートパーク

<河川空間の「ゆとりや居心地の良さ」必要性>



「河川に関する世論調査」令和4年4月(2021年11月調査)

2. 東京の水辺を取り巻く状況

(3) 防災意識の高まりと利活用の関わり

- 隅田川では防潮堤やスーパー堤防の整備によって、高潮や洪水等の水害に対する安全性は向上している。
- しかし、近年の気候変動に伴い、今後、気温上昇と降雨量の増加が見込まれており、**風水害の激甚化**へのつながりも指摘されている。2019年の台風19号では、荒川の河川水位が高まり、隅田川沿川の地域でも**水害への危機感**が高まっている。
- 東京都全体を対象とした河川に関する世論調査（2021年）においても居住地域が水害へ安全と感じるかという問いに対して、「安全」「まあ安全」の回答が2002年から23ポイント減少した。
- 水辺の遊歩道やベンチ、休憩施設等の**水辺を活用した施設の利用者は、ハザードマップや台風や水害の発生情報等の水害に対する安全性を調べた経験が多い。**
- 流域治水**（River Basin Disaster Resilience and Sustainability by All）への転換により、あらゆる関係者による**ハード・ソフト**の防災対策を行うことが求められている。

今後のあり方へのポイント

- 今後の災害への対策として、引き続き**河川管理施設の整備**を進めるとともに**水辺空間の利活用**することによって、**防災機能（ハード）と防災意識（ソフト）**を高めていくことが求められている。

<スーパー堤防の断面形状>



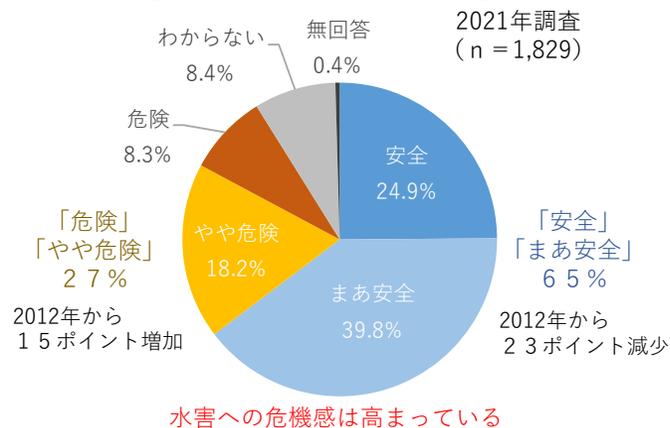
沿川の開発と連携したスーパー堤防の整備による防災・環境に優れた水辺空間を創出している

<令和元年台風19号による荒川の出水状況>

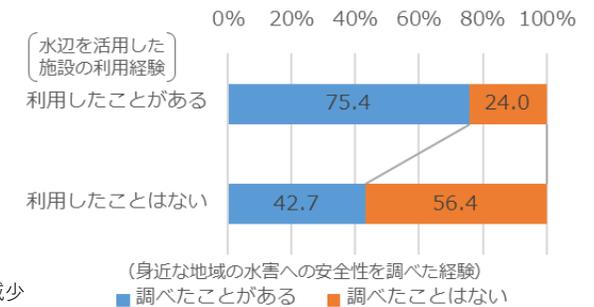


国土交通省 荒川下流河川事務所「令和元年10月台風19号による荒川下流管内の出水状況等について」

<居住地域は水害に対して安全と感じるか>



<水辺を活用した施設の利用経験と水害への安全性を調べた経験>



水辺を活用した施設の利用者は、水害への安全性を調べた経験が多い

「河川に関する世論調査」令和4年4月（2021年11月調査）

2. 東京の水辺を取り巻く状況

(4) 他都市における様々な利活用の事例

- 他都市においても、河川空間のオープン化等による多様な利活用が進んでいる。
- 水辺空間をアウトドアや健康づくりの場としての活用している事例（信濃川やすらぎ堤）や、ウォーカブルな水辺空間の創出している事例（柏の葉アクアテラス、入間川）もある。
- 地域の交流やイノベーションの場としての施設を整備し、船着場等も含めた運営管理を行っている事例（β本町橋）もあり、水辺空間が地域拠点として活用されている。
- 海外では、カフェや各種アクティビティと治水機能が共存した水辺（ニューヨーク）や美しい街並みを水上から堪能できるクルーズが楽しめる水辺（パリ）もあり、地域資産としての水辺空間を創出されている。



信濃川（新潟県） やすらぎ堤



柏の葉アクアテラス（千葉県）
著作権所有者：(C)JDP、サイト名：GOOD DESIGN AWARD
リンクURL：https://www.g-mark.org



入間川（埼玉県）



東横堀川（大阪府） β本町橋



ハンターズポイントサウスパーク（ニューヨーク）

（出典）「ソトノバHP」
(https://sotonoba.place/newyork-waterfront5)



セーヌ川（パリ）

3. 東京の水辺が目指すべき方向性

(1) 「未来の東京」が目指すビジョンと戦略

※「未来の東京」戦略（令和3（2021）年3月）：新たな都政の羅針盤として策定する都の総合計画

2040年代のビジョン「水と緑」

水と緑を一層豊かにし、ゆとりと潤いのある東京

2030年に向けた戦略「水と緑溢れる東京戦略」

水辺を核に、ゆとりと潤いにあふれたまちをつくる

開発と併せた水辺のにぎわいや、魅力あふれる河川空間など、水辺に顔を向けたまちづくりを進めることで、都民に癒しの場を提供し、まちに潤いを与える東京を実現する。

《まちづくりの機会を捉えた水辺再生プロジェクト》

- 地域や民間事業者等と連携し、水辺の魅力を活かすことで、人々が憩い楽しめるにぎわい空間を創出
- まちづくりに合わせて水辺の拠点整備を実施し、拠点間を結ぶことで、水辺や船着場周辺のにぎわい創出等に資する舟運の活性化を促進

ゆとりと潤いにあふれる水辺空間の整備

▼隅田川沿いのにぎわい空間（かわてらす）やライトアップ



▼旧晴海鉄道橋の遊歩道化（左：1989年 右：現在）



（出典）（一社）東京都港湾振興協会

にぎわいを生む水辺の拠点整備

▼Hi-NODE

▼両国リバーセンター



水辺に顔を向けたまちづくり

▼東京ミズマチ

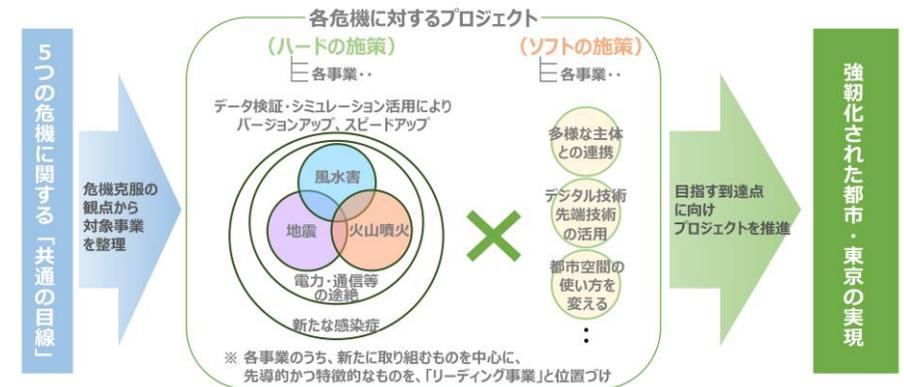
▼日本橋周辺の将来イメージ



TOKYO強靱化プロジェクト

（令和4（2022）年12月）

「未来の東京」戦略のうち、東京に迫る5つの危機（風水害、地震、火山噴火、電力・通信等の途絶、感染症）に対する施策をレベルアップさせる。



感染症にも強いまちをつくる

開放的で誰もが利用できる公園や水辺の整備

<リーディング事業>

隅田川等におけるゆとりと潤いにあふれる水辺空間の整備

- 水辺のゆとり・うるおい・にぎわいをつなぐため、川の軸や水辺の拠点を整備するなど隅田川下流域の取組を上流域まで展開し、水辺の魅力を拡げていく



3. 東京の水辺が目指すべき方向性

(2) 隅田川を中心とした水辺をモデルとした検討

- 隅田川は、歴史や文化に培われた都市や人との深い関わりを踏まえ、**まちづくりと連携した河川整備**を進めていく河川である。
- 東京を代表する河川であり、利活用への関心も高いことから、**水辺のオープンスペース**のポテンシャルも大きい。
- 隅田川を中心とした水辺をモデル**として、「未来の東京」の実現に向けた水辺整備のあり方の検討する。

荒川水系 隅田川河川整備計画における「隅田川及び沿川地域の将来像」

隅田川は、東京の歴史を刻み、伝統や文化を培い、そして人々の心のふるさととして都市と人間の生活に深い関わりを持ってきた河川であり、まちとのつながりが深い河川である。そのため、河川単独ではなく、地域との関わりの中でまちづくりと連携した河川整備を進めていく必要がある。

隅田川の将来像について検討された「隅田川未来像委員会報告」(1989年7月)においても「隅田川を中心にいきいきとしたうるおいのあるまちづくり」という基本理念を掲げている。上記のことから、「地域と連携し、賑わいと親しみのある隅田川」を河川整備計画の目標として定め、河川の整備を実施していく。

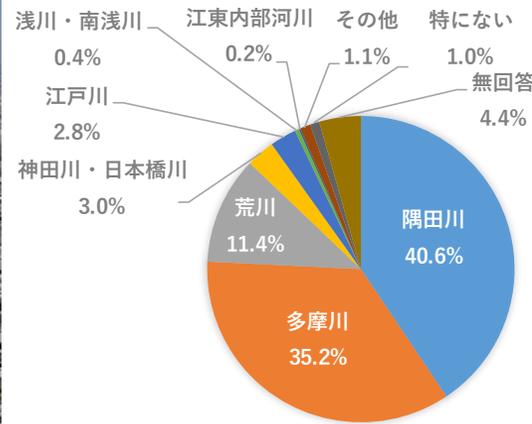
なお、地域と密接に関わり合った川としていくためには、河川整備だけでは限界がある。沿川自治体や地域住民、NPO等との連携と協働が不可欠であり、関係者の相互の努力によって、「水の都」東京の再生を図っていく。

隅田川遠景

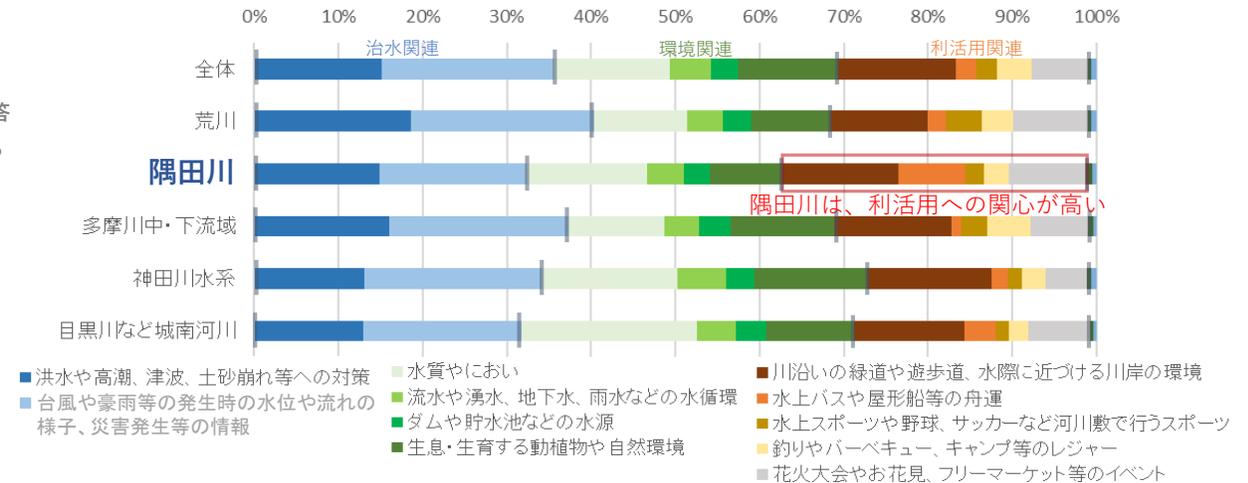


隅田川航空写真（新大橋付近上空から上流側を望む）

東京の代表的な河川



身近に感じる河川への関心

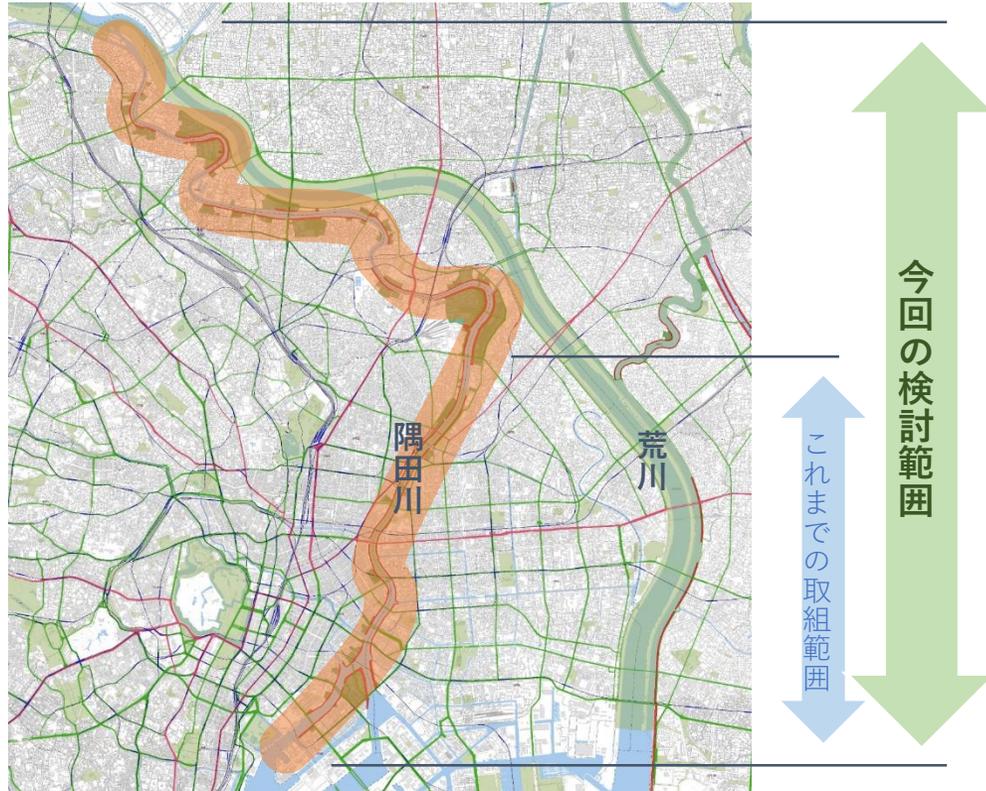


「河川に関する世論調査」令和4年4月（2021年11月調査）

3. 東京の水辺が目指すべき方向性

(3) 今後のあり方の検討範囲

- 本検討は、これまでの下流域の取組を活かし、**隅田川全域（河口から上流端である岩淵水門まで）**を検討範囲とする。
- 検討範囲に近接する沿川まちづくりや荒川および接続する支川等も検討範囲とする。



(4) 今後のあり方の位置付け

- 本検討は、東京の将来像を描いた「**未来の東京**」戦略に基づき、**ゆとりと潤いにあふれる水辺空間の整備**を進めていくための「今後のあり方」について専門家や関係機関等の意見を取りまとめたものである。
- 「今後のあり方」は、国・都・区等の行政や地域・民間事業者・市民等の**関係者がそれぞれの主体的な取組にフィードバック**するための方向性を示すものである。

隅田川等における未来に向けた水辺整備のあり方

関係者がそれぞれの主体的な取組にフィードバック

国・都・区等の行政の取組

地域・民間事業者等の取組

水辺を利活用する市民等の取組

未来の東京に向けた水辺整備のモデルケース

第2章

隅田川等における水辺整備に関する今後の方向性

1. これまでの取組の振り返り

- (1) これまでの取組の成果
- (2) 水辺空間の利活用の現状

2. 今後の課題とポイント

- (1) 今後の課題
- (2) 今後の方向性のポイント

3. 隅田川等の水辺整備に関する方向性

『水辺のゆとりと潤いを活かした東京の顔づくり』

《水辺を基軸としたネットワークの構築》

第2章の概要

- これまで、隅田川を中心とした『川の軸』と2つの『水辺回廊』を掲げ、**ハード・ソフト両面**からの取組を展開してきた。
- まちづくりと連携した河川整備やテラス照明等の動線強化により水辺の利活用が進み、テラス利用者やかわてらす[®]等の特例占有が増加する等、**東京の水辺の魅力向上として一定の成果**が見られた。
- 一方で、上流域等における動線強化のニーズや**水辺空間に対する新たな視点（健康増進、防災意識等）への期待**が高まっている。
- また、公共空間での人々の活動が多様化している中で、貴重な都市のオープンスペースとして活かしていくために**水辺空間の質向上やアクセス性、利用環境、情報発信の向上等**が求められている。
- 今後の方向性としては、水辺のオープンスペースを東京の価値として捉え、『**水辺のゆとりと潤いを活かした東京の顔づくり**』を進めていくことが望まれる。
- そのためには、隅田川等の水辺空間全体を地域をつなげる川の軸として考え、荒川や支川等を含めて、行政・民間・地域・大学等の多様な主体が連携した**水辺を基軸としたネットワークの構築**を目指していくことが重要である。

1. これまでの取組の振り返り

(1) これまでの取組の成果

「隅田川等における新たな水辺整備のあり方」（2014）に基づき、隅田川下流域を中心にハード・ソフト両面からの取組を展開し、拠点整備や動線強化、利活用促進等を進めてきた。

隅田川等における新たな水辺整備のあり方

基本コンセプト

「人々が集い、にぎわいが生まれる水辺空間の創出」

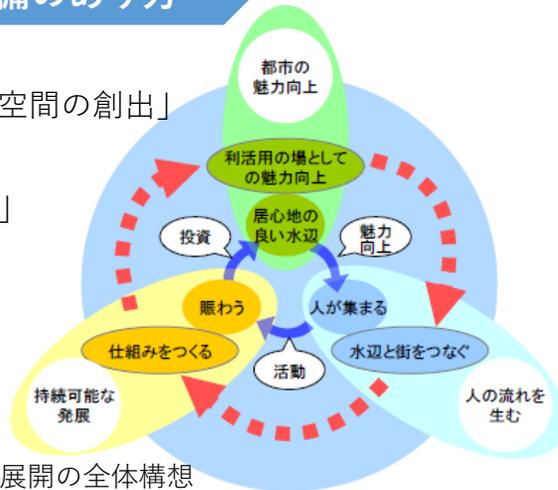
基本的な考え方

「水辺の利活用を促す3つの取組の連携」

- ① 利活用の場としての魅力向上
- ② 水辺と街の連続性・回遊性の向上
- ③ にぎわい創出のための持続可能な仕組みをつくる

隅田川をモデルとした施策の展開

- ・ 隅田川を中心とした水辺における施策展開の全体構想
- ・ にぎわい創出のための持続可能な仕組みの方向性

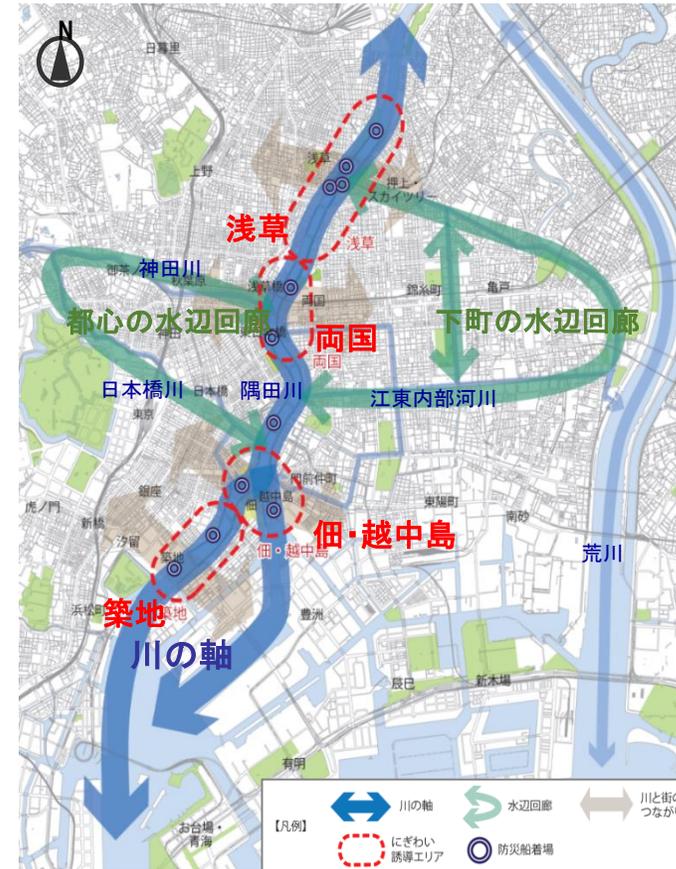


これまでの取組の実績

- 両国リバーセンターや北十間川プロムナード等の事業化した拠点整備が完了
- テラス照明については、約9kmの整備が完了（2022年度末）
- 隅田川等での特例占用件数は、1件（2013）から10件（2022）に増加
- 2023年の隅田川サポーター登録団体は、39団体となり年々増加
- 隅田川テラスの通行者数が増加（浅草1.2倍、両国1.8倍、明石町2.3倍） ※2014比較

《隅田川を中心とした水辺における施策展開の全体構想》

水辺の魅力を活かした東京の顔づくり ～隅田川を中心とした『川の軸』と2つの『水辺回廊』～



隅田川を中心とした『川の軸』

「にぎわい誘導エリア」の設定
『浅草』『両国』『佃・越中島』『築地』における重点的な施策展開

【重点整備】

スーパー堤防、修景、船着場、カフェ等に必要な設備等

【事業連携】

ライトアップ、都市開発、PFI等

【規制緩和・準則適用】

準則の区域指定、利用に関する規制緩和、施設の一般開放等

「水辺の動線」強化

【川沿いの動線の連続化向上】

支川合流部等を連絡橋等でつなぎ、連続性・回遊性を向上

【河川照明】

夜間の明るさを確保し、テラスへの誘導性や夜間景観を向上

周辺エリアでの「水辺回廊」

【都心の水辺回廊】

沿川開発と連携した川床やオープンカフェ、水辺を活かした再開発等

【下町の水辺回廊】

開門等を含めた観光舟運、公園等と連携した水辺の散策路等

隅田川等における新たな水辺整備のあり方2014.2

「水辺の魅力を活かした東京の顔づくり」における主な取組

【水辺の動線強化】

- 支川合流部などのテラス不連続箇所の解消
- テラスへの河川照明の設置



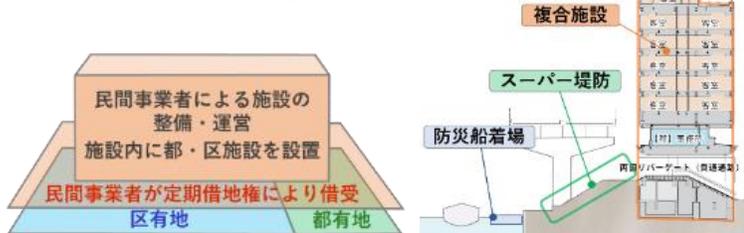
【両国リバーセンター】

- 公共用地の定期借地による官民連携事業
- 施設整備にあわせてスーパー堤防及び防災船着場を整備



複合拠点施設の概要

- ホテル、レストラン、舟運待合所、子育てひろば、カフェ
- 2020年11月12日全面開業



【北十間川プロムナード（東京ミズマチ） ・すみだリバーウォーク】

- 護岸の耐震補強にあわせて、歩行空間となるテラスを整備
- 河川、道路、公園、鉄道高架下が一体となった空間創出
- 都、区、鉄道会社による官民連携事業



「東京ミズマチ」として、2020年6月18日にオープン



『隅田公園再整備』



『すみだリバーウォーク』
※鉄道橋梁に遊歩道を設置

【隅田川サポーター】

- 隅田川に関心があり、活動したい人の集まり
(観光協会、NPO法人、教育機関、民間企業ほか)

情報発信体制の強化
民間の活力を引き出す取組



Twitter等による
SNS情報発信



隅田川テラスを活用した
「隅田川マルシェ」開催

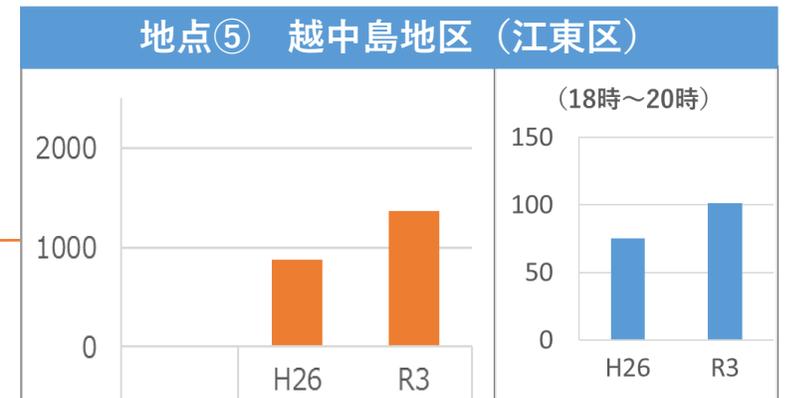
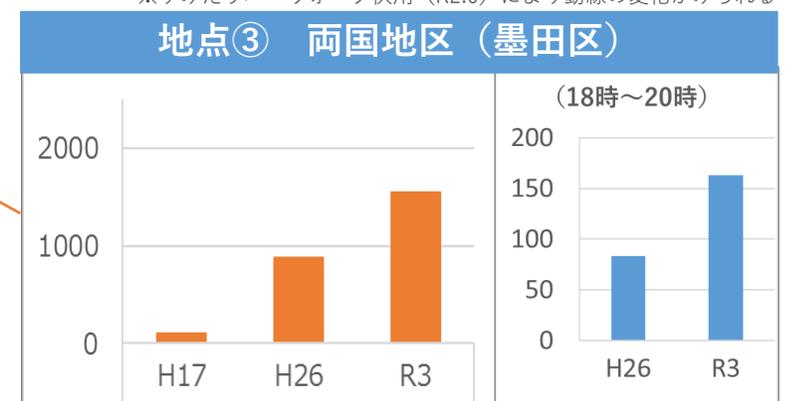
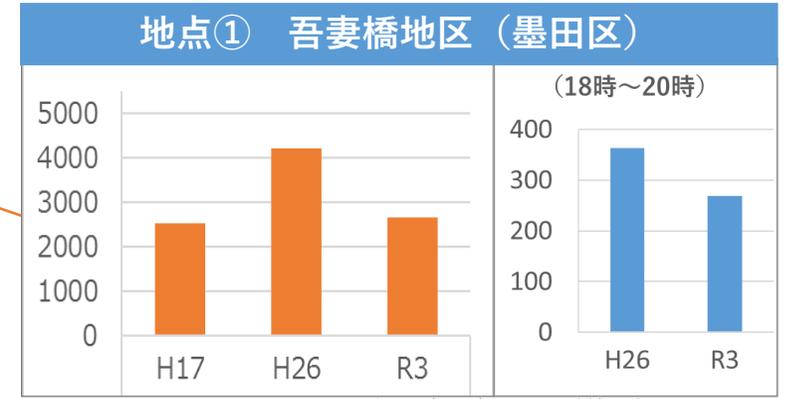
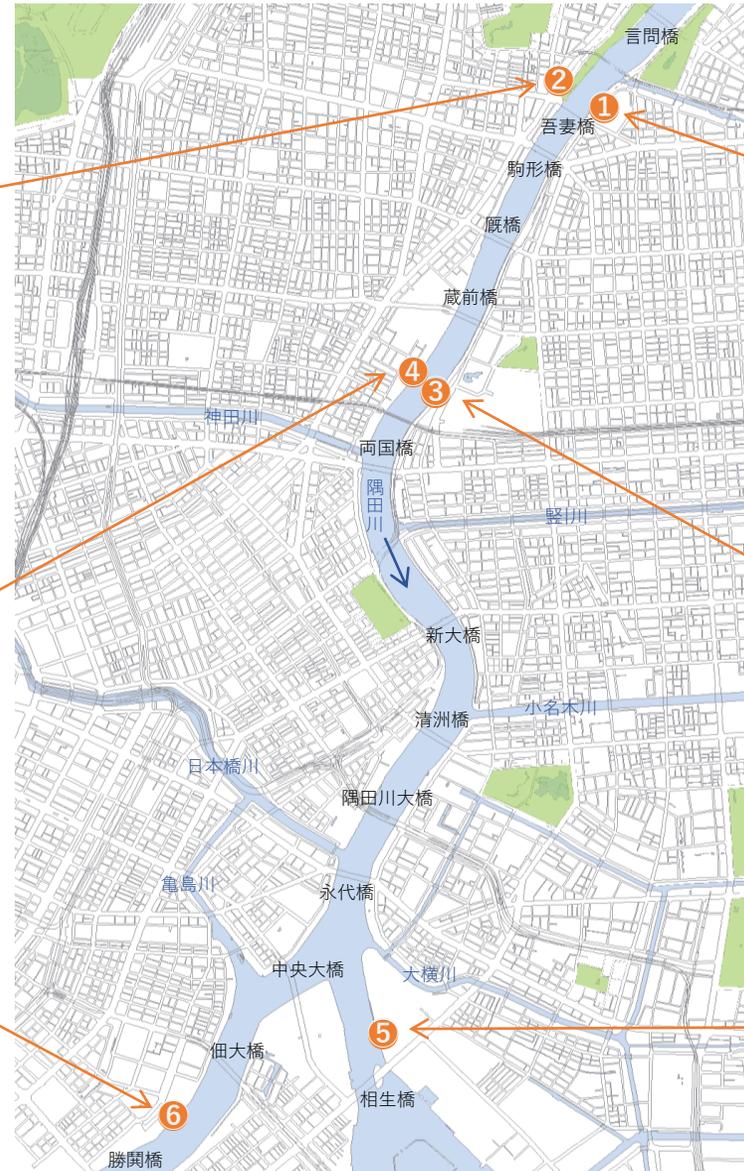
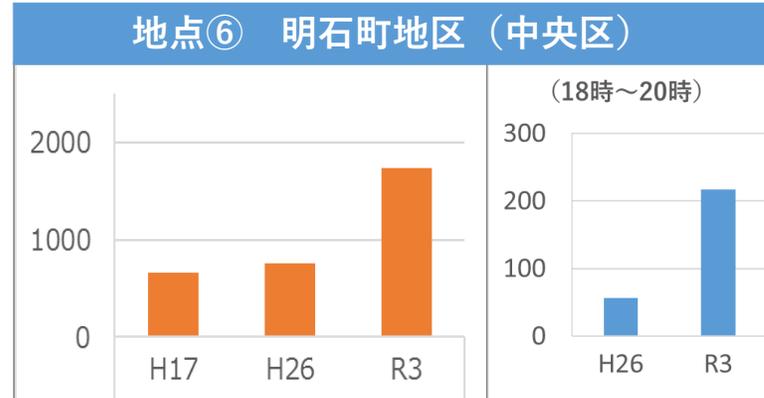
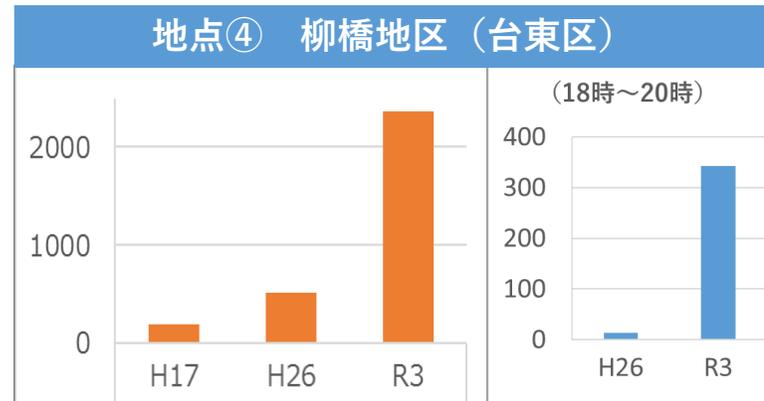
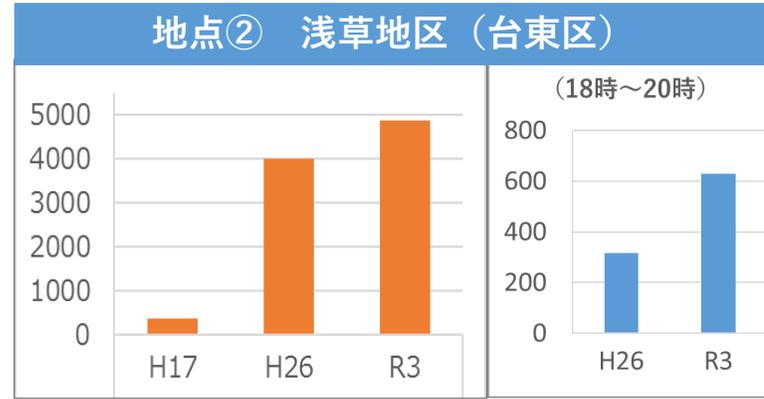
【かわてらす®（川床）】

- 規制緩和による河川敷地の利活用促進



隅田川テラスの通行者数の変化

2005 (H17) ・ 2014 (H26) ・ 2021 (R3) 調査時期：秋季 (11月・休日)



※すみだリバーウォーク供用 (R2.6) により動線の変化がみられる

1. これまでの取組の振り返り

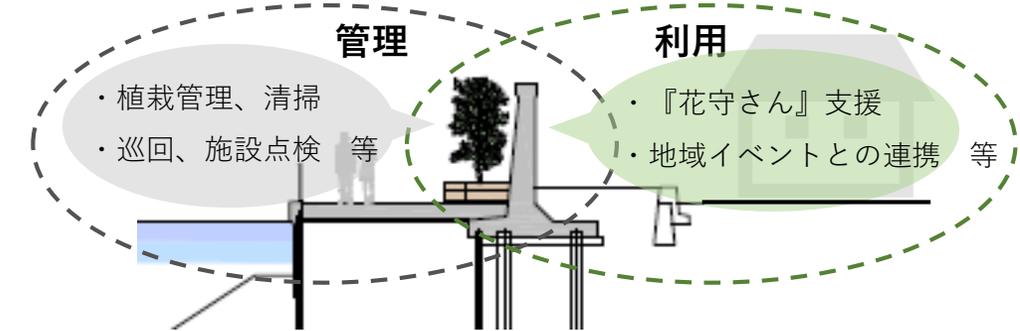
(2) 水辺空間の利活用の現状

- 隅田川は人々の活動の場としてこれまでも深く関わっており、散歩・ウォーキング等の日常的な利用だけでなく、花火大会や灯ろう流し等の地域の行事、CM等の撮影、水上バスによる観光などといった、多様な場面で活用されている。
- 維持管理においては、**水辺環境保全**の取組により、植栽管理や清掃、巡回等に加え、ボランティアと連携した花壇の管理や地域団体と連携したイベントの開催等が行われている。
- 近年は、オープンカフェや川床の設置等といった**民間事業による水辺空間の活用**が行われ、再開発と連携した水辺活用や地域と連携したマルシェ等の水辺のにぎわいも創出されている。
- 舟運の利用が多い下流域では、**防災船着場の一般開放**も行われている。

水辺の利活用に関する動向

- 隅田川では利活用の基盤となる**水辺環境保全**に取り組んでおり、地域のボランティア活動等も行われている。
- 民間事業者によるオープンカフェ等を設置する**河川空間のオープン化**は下流域を中心に進んでいる。
- 地域と連携するマルシェや上下流をつなぐアートイベント等の**水辺の活動が多様化**してきている。

【隅田川における利活用の基盤となる取組】 隅田川の水辺環境保全による管理と利用の連携



植栽管理



地域ボランティア『花守さん』



清掃・点検



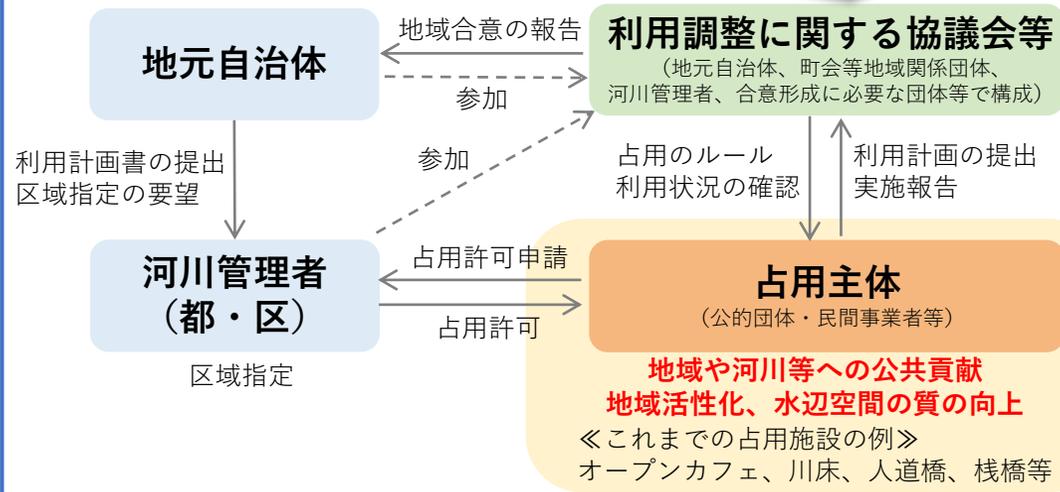
地域イベントとの連携

河川敷地占用許可準則に基づく占用による利活用

【河川空間のオープン化（地域や民間による河川敷地の利活用）】

- 河川空間のオープン化制度を活用した水辺空間の利活用は、**隅田川下流域**を中心に展開されている。
- オープンカフェやかわてらす®（川床）等の飲食施設に加え、近年では人道橋や栈橋等の**多様化**が進んできた。
- また、他河川においても**民間開発に合わせたオープン化**の取組を活用している事例も生まれてきている。

- 地域関係者や行政等と**利用方法等について調整**
- 公共空間である**河川区域の利用について合意形成**を図る
- 利用条件やルール、地域や河川への還元手法の設定**等



河川空間のオープン化の基本的なスキーム



隅田公園オープンカフェ



かわてらす®（川床）



北十間川プロムナード（東京ミズマチ）



すみだリバーウォーク（人道橋）



渋谷リバーストリート（橋上広場・遊歩道）



WATERS竹芝（栈橋・干潟）

隅田川における水辺の利活用の拡がり

【すみだがわオープンテラス】

- 隅田川テラス等の**恒常的な利活用**に向けて、水辺を楽しめる空間とマルシェやキッチンカー等のコンテンツを用意し、身近なオープンスペースとしてのテラス活用を試行。
- 隅田川テラスでの**マルシェ等のイベントへのニーズ**が高い。

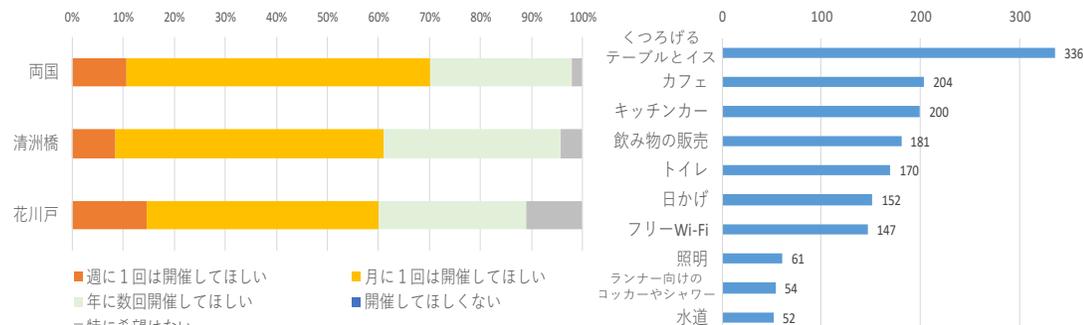


両国



越中島

「マルシェ」の開催・隅田川テラスにほしいサービス



6～7割が月に1度程度の開催を希望

水辺での憩い（滞留）ニーズが大きい

【隅田川サポーター交流会】

- 隅田川サポーターの活動や都の取組を報告、隅田川の魅力向上等に関する意見交換等を実施。
- サポーター同士の交流を深め、**活動の連携・活性化**を促す。
- 交流会をきっかけに隅田川マルシェの活動が始まる。

2022年度実施した隅田川サポーター拡大交流会



隅田川クルーズ
隅田川サポーターや隅田川での活動についてフリートークを実施



隅田川×文化・芸術
隅田川でのアート活動について関連団体が取組やアイデアを話し合う



隅田川×水辺活用
エリアマネジメントや河川敷の活用事例等を話題に公共空間の活用を話し合う



隅田川×地域・マルシェ
オープンカフェやマルシェ等の取組から地域と水辺のつながりについて話し合う

防災船着場の活用

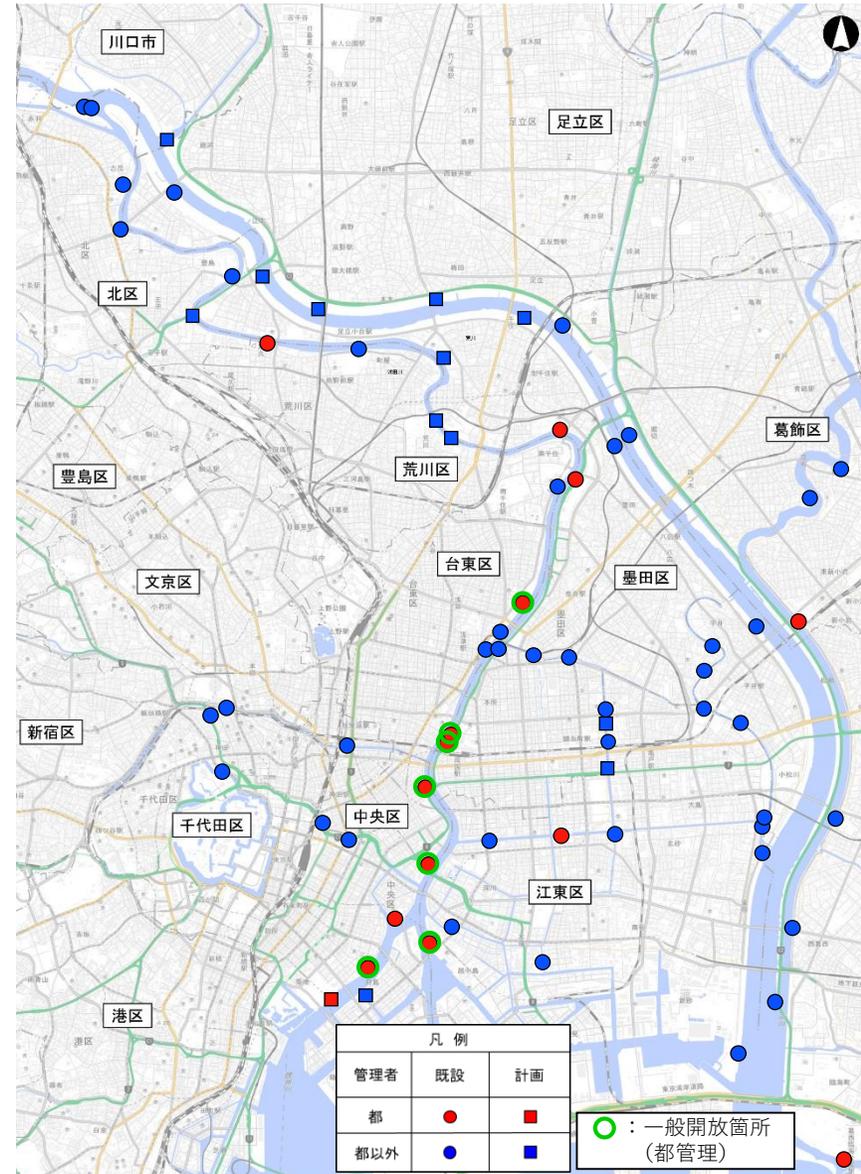
【防災船着場の一般開放】

- 防災船着場は、災害時において、**河川舟運が住民の避難や救急物資の輸送などの機能を有効に果たすための拠点**となることを目的として設置されている。
- 平常時利用（一般開放）については、**習熟訓練と水辺空間の魅力向上**等のため、2006年から開始しており、隅田川沿いの都の防災船着場においては、6か所で実施している。
- 平常時利用は、受益者負担を原則としているため、**舟運利用のニーズが少ない箇所では、進んでいない状況**である。
- 今後、舟運による防災性の向上や地域活性化を進めていくためには、防災訓練や一般開放等の**防災船着場の活用拡大**に向けた検討を進めていく必要がある。

【日常的な利活用を目指した防災船着場の運用に関する課題】

- 防災船着場の**知名度**向上
- 防災船着場周辺の**魅力度**向上
- **安全に利用できる船着場の機能**確保
- 船着場を利用しやすい**仕組み**の確立

船着場までの利便性や、そこから乗船するまちの魅力等、官民が連携した**地域としての一体的な利活用**が求められる



浅草・二天門



越中島
(一般開放による屋形船の利用様子)



明石町
(防災訓練の様子)

2. これからの水辺整備に向けた課題とポイント

(1) 今後の課題

①東京の水辺を取り巻く状況からの課題

【全国的に進む河川空間のオープン化】

都市の貴重な**オープンスペース**として水辺の活用

【ポストコロナを見据えた水辺空間への期待】

生活様式の変化からの**新たなニーズ**への対応

【防災意識の高まりと利活用の関わり】

気候変動や流域治水等への対応としての利活用を通じての**防災意識**の向上

②これまでの取組からの課題

【上流域への展開】

大規模な住居系開発や公園等と連担するスーパー堤防等の整備が進んだことによる照明やスロープ等の**動線強化**に対する地域ニーズへの対応

【下流域での拡充】

沿川の**都市開発**等との連携や**水辺の利活用**に向けて更なる取組の拡充

③水辺空間や船着場の利活用からの課題

【利活用の環境】

利活用に関わる**申請・関係者調整**の円滑化、水道や電気等の**利用環境**の改善、利活用の**情報共有**、活動団体の**つながり・交流**の場の創出

【防災船着場の活用】

防災機能の向上や舟運等による地域活性化に資する**防災船着場一般開放**の拡大

(2) 今後の方向性のポイント

1 水辺のオープンスペースを活かす

- ✓ 水辺のオープンスペースが持つゆとりと潤いを東京の水辺の**価値**として捉え、**地域の魅力**や**まちづくり**につながる水辺空間の創出を目指す

2 安全・魅力の両面から水辺空間を活用する

- ✓ 水辺の利活用が**地域の防災意識の向上**に寄与することを意識し、**安全と魅力の両面**から水辺空間の活用を目指す

3 地域の個性を活かした水辺空間を創出する

- ✓ 上下流の地域特性や利用者特性の違い等を踏まえ、**地域の個性を活かした**水辺空間の創出や使い方を旨とする

4 水辺の拠点をつなぐ水陸のネットワークを構築する

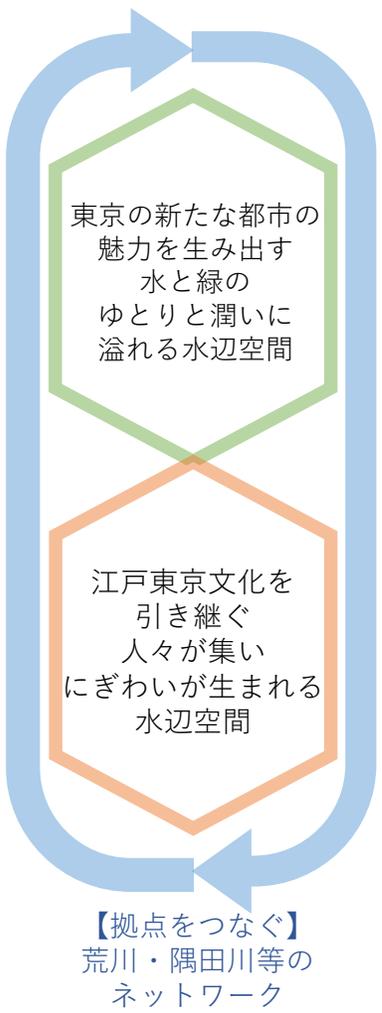
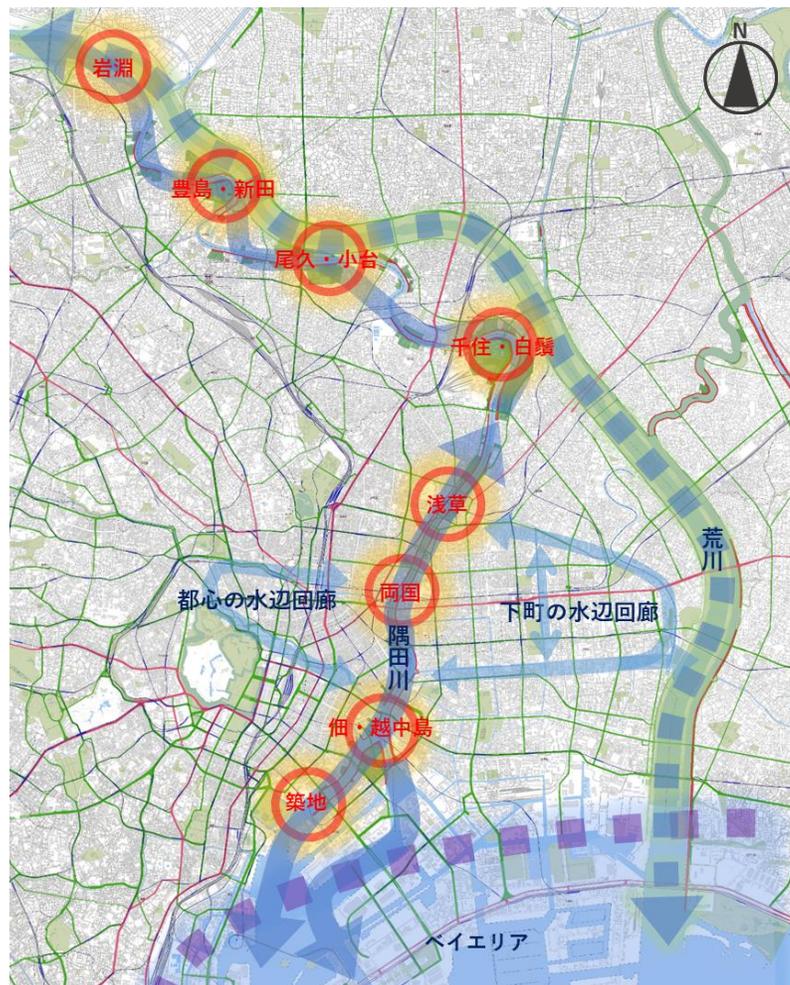
- ✓ 水陸の交通結節点に加え、荒川やベイエリアとの繋がりを踏まえた**拠点**を設定し、それらを繋ぐ**水路や陸路のネットワーク**の構築を目指す

5 多様な視点で水辺の利活用を進める

- ✓ 水辺の利活用を進めていくために、**官民連携の推進**や、ウォーキング等の**健康増進**、公園のような**居心地の良い空間創出**等を目指す

3. 隅田川等の水辺整備に関する方向性

『水辺のゆとりと潤いを活かした東京の顔づくり』 ～水辺のゆとり・うるおい・にぎわいをつなぐ～



《水辺を基軸としたネットワークの構築》

- 「点」 『水辺の拠点』 を設定し、重点的に施策を実施
- 「線」 『川の軸』 を展開し、動線・ネットワークを強化
- 「面」 『水辺の利活用』 を進め、水辺の魅力を街に拡げる

【方向性のポイント】

- 1 水辺のオープンスペースを活かす
- 2 安全・魅力の両面から水辺空間を活用する
- 3 地域の個性を活かした水辺空間を創出する
- 4 水辺の拠点をつなぐ水陸のネットワークを構築する
- 5 多様な視点で水辺の利活用を進める



人々が集いにぎわいが生まれる水辺



水と緑のゆとりと潤いに溢れる水辺

第3章

『水辺のゆとりと潤いを活かした東京の顔づくり』による取組

1. 水辺を基軸としたネットワークの構築

「点」水辺の拠点／「線」動線強化の展開／「面」利活用の推進

2. 取組の体系

4つの視点から取組を抽出
(水辺空間の質向上／街とのつながり／利活用の推進／可能性の拡がり)

3. 取組イメージ

- (1) 居心地が良く歩きたくなる水辺空間の創出
 - (2) まちづくりと連携した河川整備の推進
 - (3) 恒常的な利活用の仕組みづくり
 - (4) 新たな事業展開・連携
- (参考) 『未来の隅田川』将来イメージ

4. 拠点ごとの取組イメージ

岩淵／豊島・新田／尾久・小台／千住・白鬚
浅草／両国／佃・越中島／築地

第3章の概要

- 水辺を基軸としたネットワークを構築するためには、「点」として水辺の拠点を創出し、「線」として動線をつなぎ、「面」として街と一体となった利活用を進めていくことが重要である。
- 点・線・面の考え方を基にした隅田川等を中心とした水辺空間での取組としては、**水辺空間の質向上や街とのつながり、利活用の推進、可能性の拡がり**の4つ視点で考えることができる。
- 1つ目は、水辺の拠点設定や照明・スロープ等の動線強化等による「**居心地が良く歩きたくなる水辺空間の創出**」である。
- 2つ目は、再開発や公園整備等の機会を捉えた水辺の拠点整備を進める「**まちづくりと連携した河川整備の推進**」である。
- 3つ目は、特例占用の活用等による持続可能な水辺のマネジメントを促す「**恒常的な利活用の仕組みづくり**」である。
- 4つ目は、隅田川と荒川等のネットワーク連携や健康増進・防災意識向上等の「**新たな事業展開・連携**」である。
- これらの取組を地域の特性に合わせて、河川事業のみならず、地元自治体や民間企業等が事業展開・連携していくことが望まれる。

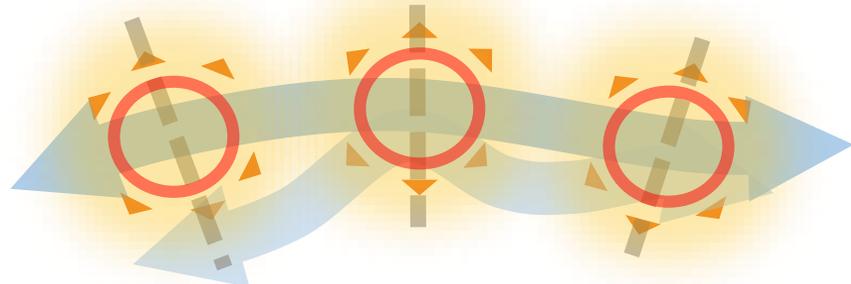
1. 水辺を基軸としたネットワークの構築

隅田川を中心とした水辺のネットワーク構築のねらい

隅田川のゆとり・うるおい・にぎわいを『川の軸』として、つなぎ、街へ広げる

《水辺を基軸としたネットワークの構築》

- 「点」 『水辺の拠点』を設定し、重点的に施策を実施
- 「線」 『川の軸』を展開し、動線・ネットワークを強化
- 「面」 『水辺の利活用』を進め、水辺の魅力を街に広げる

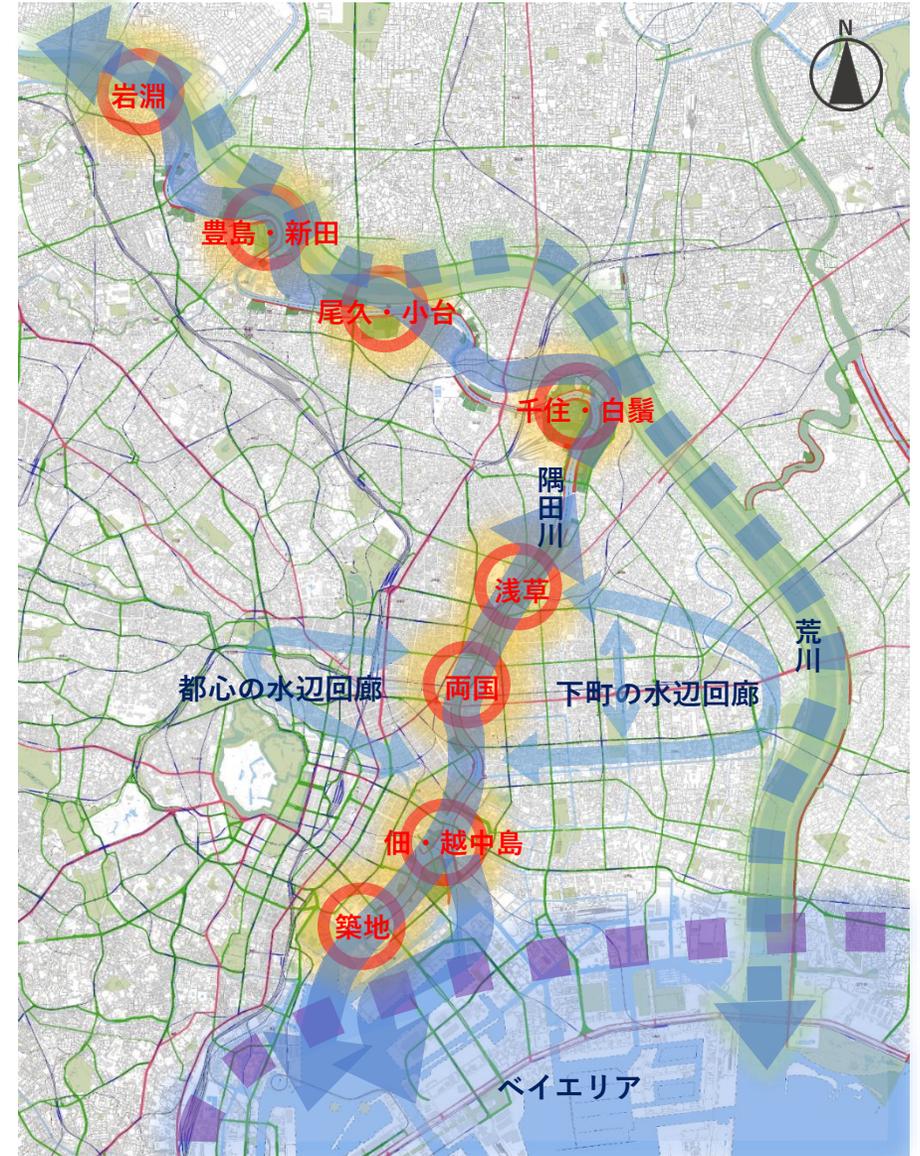


上下流の水辺の拠点を『川の軸』でつなぎ、水辺の魅力を広げていく



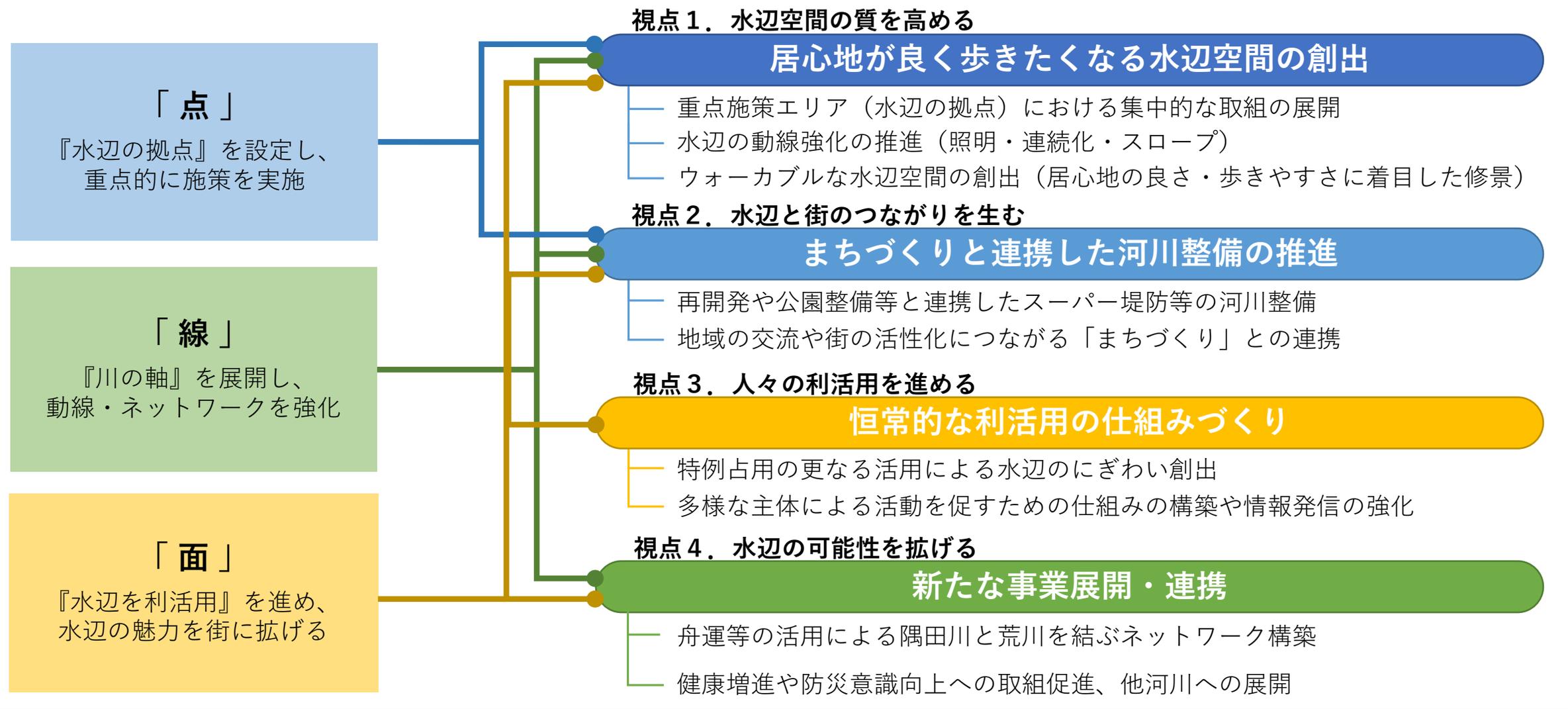
【取組の展開手法】

点・線・面の考え方を基にした取組の展開手法は、**水辺空間の質向上・街とのつながり・利活用の推進・可能性の拡がり**の4つ視点で考える。



2. 取組の体系

隅田川等における水辺を基軸としたネットワークの構築に向けた取組



3. 取組イメージ

(1) 居心地が良く歩きたくなる水辺空間の創出

隅田川全域で水辺のウォーカブルネットワークを創出する

□ 重点施策エリア（水辺の拠点）における集中的な取組の展開

→ [築地] [佃・越中島] [両国] [浅草] [千住・白鬚] [尾久・小台] [新田・豊島] [岩淵]

□ 水辺の動線強化の推進（照明・連続化・スロープ等）

→ 動線強化施策の下流の拡充と上流への展開

□ ウォーカブルな水辺空間の創出（居心地の良さ・歩きやすさに着目した修景）

→ 老朽化した舗装の再修景、段差解消、緑化の充実、ベンチ、サインの設置等



居心地が良く歩きたくなる水辺空間の創出に向けて

水辺の拠点と動線強化によるネットワークの構築

水辺と街のつながりを生む水辺の拠点を設定し、水辺の動線強化やまちづくりとの連携、拠点間のネットワーク構築等の取組を誘導・連携させる。

これにより、地域の安全と魅力の両面から水辺のオープンスペースを活用していく。特に動線強化においては、水辺と街の連続性や回遊性、災害時の点検・避難路の確保等の機能を高めていく。

将来的には、隅田川全体をウォークブルな空間としてつなぎ、水辺のゆとりと潤いを上下流全体で活かしていくことを目指す。

水辺の拠点の設定

- 水辺の拠点を設定し、関係者の取組を誘導・連携させて、次の機能を創出
 - ① 水辺と街の関わり強化
 - ② 水陸の交通結節機能の向上
 - ③ 安全で快適な利活用の基盤創出
 - ④ 他水域とのネットワーク形成

水辺の動線強化の展開

- テラス照明による夜間の動線、避難経路の確保
- スロープや階段等による橋詰部や船着場等からのアクセス性向上
- テラス不連続部の解消（支川合流部、橋梁下部など）

ウォークブルな水辺空間の創出

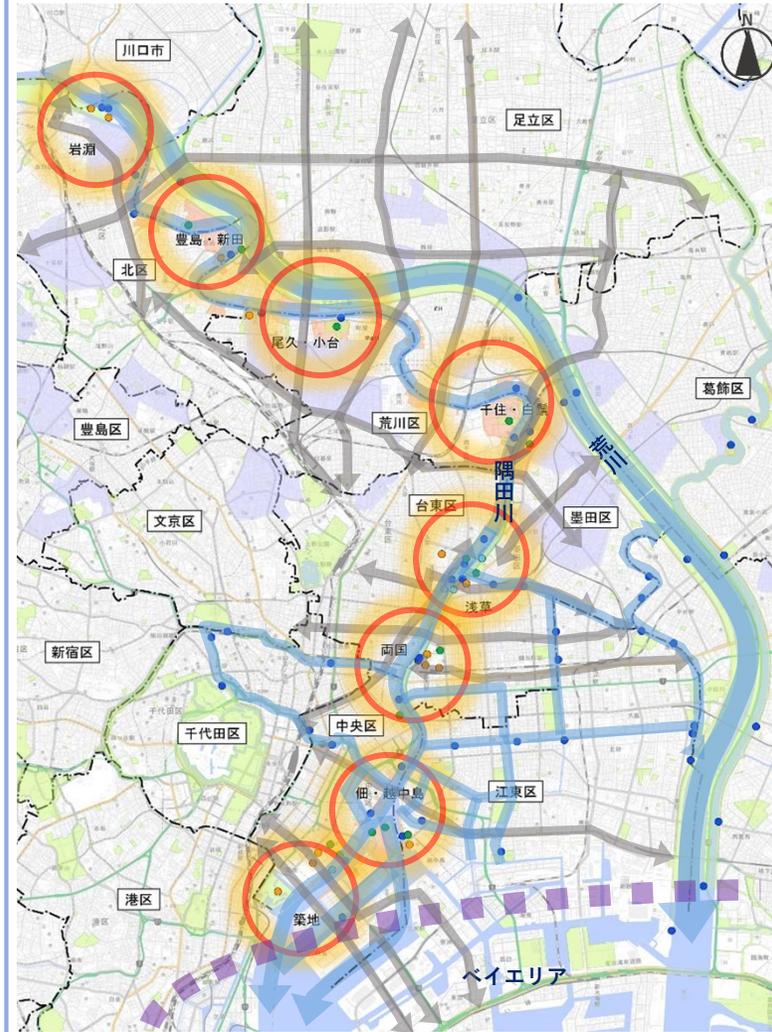
- 老朽化したテラスの再修景
- 段差解消や緑化の充実、木陰づくり、ベンチ、サイン等による水辺空間の質的向上
- 居心地の良さや歩きやすさに着目したウォークブルデザインの導入の検討



ウォークブルデザインを導入した水辺空間
(柏の葉アクアテラス)

著作権所有者：(C)JDP、サイト名：GOOD DESIGN AWARD
リンクURL：https://www.g-mark.org

「水辺の拠点」設定の視点



水辺の拠点は、沿川の街と河川との関係、道路や舟運等の交通結節、安全で快適な利活用を行う基盤、荒川やベイエリアとのつながりを勘案し、上下流で8つのエリアを設定する。

【視点①：街との関わり】
街とのつながりや地域資源等

【視点②：交通結節】
道路や舟運等の交通結節
(街道や防災船着場等)

【視点③：利活用の基盤】
安全で快適な利活用を行う基盤
(スーパー堤防等)

【視点④：ネットワーク】
荒川やベイエリアとのつながり

- 凡例
- 公園緑地
 - 水域
 - スーパー堤防事業化区域
 - 木造住宅密集地域整備事業実施地区
 - 主要道路網
 - 水辺の拠点
 - 船着場
 - 簡易船着場
 - 公園
 - 地域資源

※拠点の凡例は、範囲を示すものではない

3. 取組イメージ

(2) まちづくりと連携した河川整備の推進

まちづくりの機会等を捉えた官民連携による水辺の拠点整備を推進する

□ 再開発や公園整備等と連携したスーパー堤防等の河川整備

- 再開発や都市再生等のまちづくりと連携した河川整備（築地、両国、浅草、千住等）
- 荒川高規格堤防や沿川公園と連携した河川整備（小台、新田、町屋等） 等

□ 地域の交流や街の活性化につながる「まちづくり」との連携

- 沿川地域のまちづくりビジョン等の都市計画や景観形成との連携（浅草、日本橋等）
- 地域や民間と連携した河川施設の活用（越中島、江東内部河川等） 等



まちづくりと連携した河川整備の推進に向けて

再開発や公園整備等と連携したスーパー堤防等の河川整備

再開発や公園等と連携したスーパー堤防等の河川整備を行う際に、民間活力を最大限に引き出していくために、官民連携による河川整備手法の検討と実践を進めていく。

地域ごとの沿川開発のニーズや公園利用手法等によって状況が変わるため、地域の特性に応じた手法を選択していく必要がある。

【まちづくりと連携した河川整備手法の検討ケース事例】

- ①沿川再開発等と連携した修景整備やエリアマネジメントの検討
- ②堤防敷地や船着場待合施設等の河川施設の活用検討
- ③堤防等の河川施設における広場や駐車場等の多機能化の検討 等



沿川再開発事業による修景整備やエリアマネジメントのイメージ



緩傾斜の堤防敷地を活用している事例
(新潟市・信濃川やすらぎ堤)



広場や駐車場等を併せ持つ多機能な堤防の事例
(ドイツ・エルベ川)

地域の交流や街の活性化につながる「まちづくり」との連携

地域ニーズに合わせて、テラスや堤防天端、水面等の活用も多様化している。地域や民間による利活用と連携した河川整備や河川施設等の活用を進めていくことで水辺と街のつながりを強化していく。

【隅田川における試行事例「すみだがわオープンテラス」】

- 隅田川での恒常的な利活用の試行である「すみだがわオープンテラス」等を引き続き実施し、まちづくりとの連携手法の検討と機運醸成を行う。
- 河川敷地を「イベント広場」として占用し、関係者調整や利用手続きの一元化、船着場関連施設や河川水面の活用等の検討を進め、地域の交流や活性化につながる水辺空間を創出していく。



越中島エリアでのマルシェの様子



船着場関連施設の活用・連携のイメージ



イベント広場の事例
(目黒川船入場)



河川水面の活用事例（レストラン船）
(大阪市・大正タグボート)

3. 取組イメージ

(3) 恒常的な利活用の仕組みづくり

多様な利活用を生む、持続可能な水辺のマネジメントの仕組みを構築する

□ 特例占用の更なる活用による水辺のにぎわい創出

- 民間事業と連携した利活用の推進（民間主体の河川空間マネジメント、イベント広場等の面的な占用）
- まちづくりと連携した利用環境の向上（アクセスサインや電気・水道等の環境整備） 等

□ 多様な主体による活動を促すための仕組みの構築や情報発信の強化

- 中間支援組織の検討（利用調整や情報発信、河川や地域への公共貢献等の一元化等）
- 隅田川サポーター等による水辺の活動連携や情報発信の強化 等

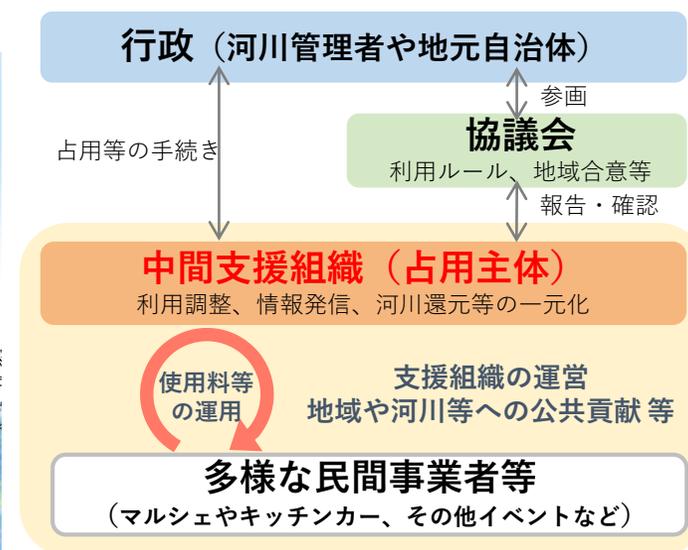
さらに 河川空間が
使いやすくなります

○更なる規制緩和に関する社会実験の概要

- ① 占用期間の更新保証
- ② エリア一体型の占用
- ③ 施設使用者の拡大

リバサイト
河川空間の利用に関する規制緩和 -通称 RIVASITE-

【中間支援組織によるイベント広場等の運用イメージ】



民間主体の河川空間マネジメントの例
(令和5年5月25日国土交通省 Press Release
河川敷地の更なる規制緩和に向けた社会実験の運用を開始します)

※このスキーム案は1つの事例であり、今後具体化にあたっては、地域特性や規模等を踏まえ検討が必要

恒常的な利活用の仕組みづくりに向けて

【これまでの取組を推進する方策】

①水辺を利活用する場や環境の創出

- 人々の活動を促す舞台となる場とする
- 照明やスロープ、連続化等の動線強化
- 隅田川マルシェやアートイベント等の支援
- ラン&ウォーキングマップ等による情報発信 等

②特例占用等の活用促進

- 社会実験等による機会を生む
- かわてらす®やオープンテラス等の試行 等

③水辺の活動組織等への支援

- 利活用を支援する人やノウハウを蓄積し、共有する
- 隅田川サポーターによる情報発信や活動連携 等

④官民連携の推進と河川施設の多機能化

- 行政と民間がお互いにメリットを得られる形での整備や管理運営で連携する
- 両国リバーセンターや東京ミズマチ等の官民連携事業
- 防災船着場の一般開放 等

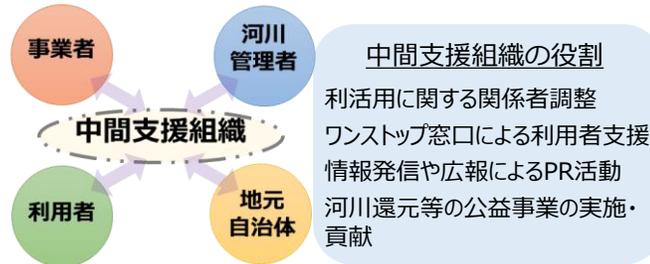
⑤水辺の環境向上や地域貢献等の推進

- 地域や民間の利活用により、水辺の魅力向上を図り、さらなる利活用を促す
- 花守さん等の東京都公園協会の水辺公益事業との連携
- 再開発に伴うまちのエリアマネジメントとの連携 等

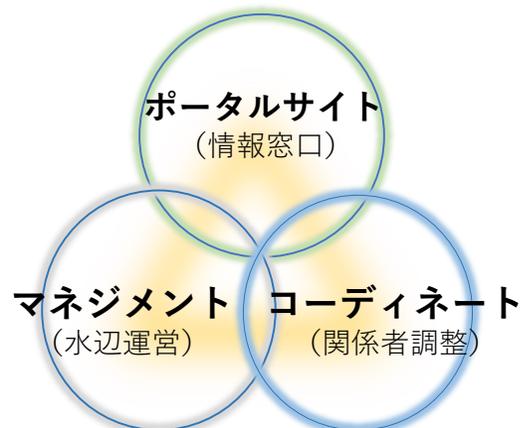
【導入すべき仕組み】

水辺のエリアマネジメント

- ✓ 中間支援組織による情報・諸申請・調整・河川還元等を一元化し、水辺の利活用促進
- ✓ 河川敷地の活用や地域の価値向上等の対価による組織運営を目指す



中間支援組織の機能



【将来的な利活用の仕組み】

広域的な利活用の調整・連携への展開

行政と地域・民間の間を取り持つ広域的な情報共有や連携等を行う仕組みの構築を目指す

【広域的な方向性のモニタリング】

各拠点の特性や取組の状況を共有し、隅田川全体での方向性の調整、地域ごとの連携を促す

【地域ごとの水辺のエリアマネジメント】

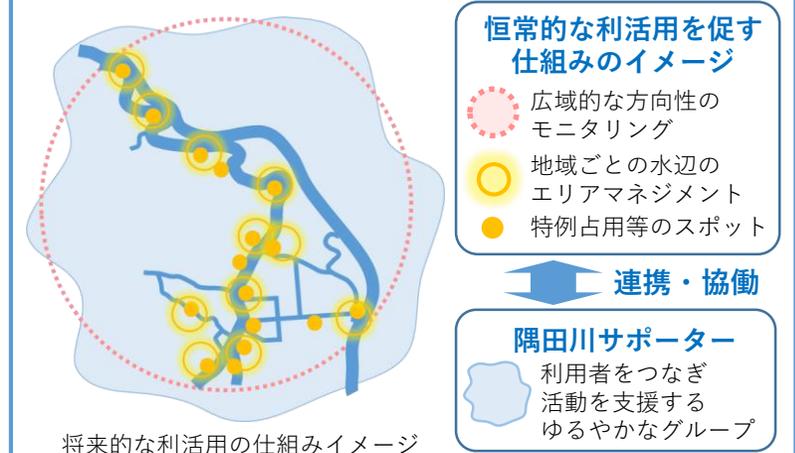
地域での活動や特例占用の活用等による水辺の利活用を核に地域ごとの水辺空間のマネジメントを行う

【特例占用等のスポット】

地域のニーズに応じた水辺空間でのボランティアや特例占用を活用した民間事業等を推進していく

【隅田川サポーター】

隅田川沿川地域の民間活動の情報共有・発信を促し、利用者をつなぐ機運醸成等を図る



将来的な利活用の仕組みイメージ

3. 取組イメージ

(4) 新たな事業展開・連携

隅田川上流域や他河川等での可能性を模索し、新たな水辺の利活用へと広げていく

□ 舟運等の活用による隅田川と荒川を結ぶネットワーク構築

→隅田川と荒川における舟運等と連携した防災船着場の活用

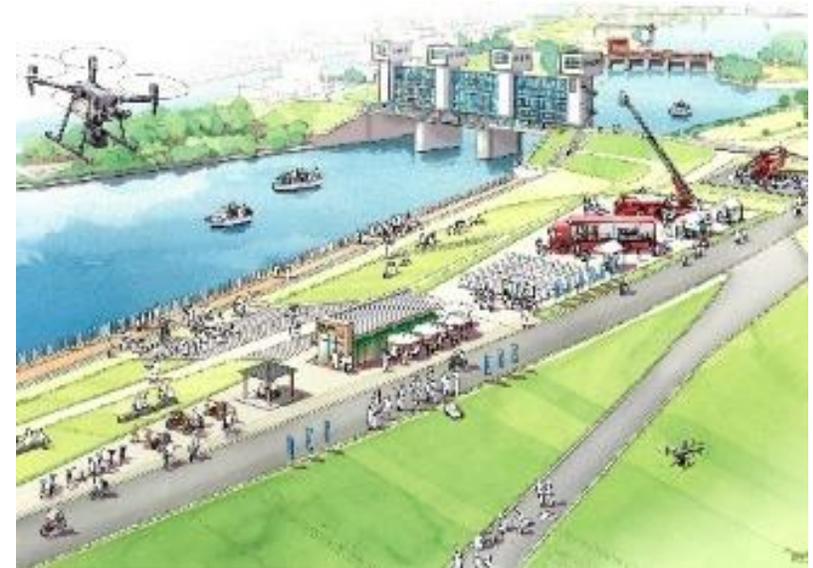
(防災船着場の平常時利用拡大、荒川河川敷との利用連携、舟運を活かしたインフラツーリズム等)

→アウトドアやアートイベントなどの拠点の魅力を高めるシティプロモーションとの連携 等

□ 健康増進や防災意識向上への取組促進、他河川への展開

→ウォーキングコースの設定等による健康増進への取組や防災船等を活用した防災訓練の展開

→利活用のルールや先例事例などの情報発信強化による他河川への展開 等



新たな事業展開・連携に向けて

隅田川や荒川等の水辺を基軸としたネットワークの構築

隅田川・荒川・支川等のそれぞれの特徴を踏まえて、河川やテラス、高水敷、防災船着場等をつないでいく取組を展開し、水辺を基軸としたネットワークを構築していく。

① 隅田川テラス

- ・テラスやスーパー堤防による歩行動線（散歩やランニング等）の連続性を高めていく。
- ※テラスの自転車通行は不可

② 荒川河川敷（緊急用河川敷道路）

- ・災害時の物資輸送等のため、緊急用船着場とも接続している。自転車の利用も多く、防災・利用両面のネットワーク機能を有している。

③ 支川等の水辺回廊やベイエリア

- （都心の水辺回廊） 神田川や日本橋川等の都心部を流れる支川
- （下町の水辺回廊） 荒川と隅田川を結ぶ小名木川等の江東内部河川
- （上流の支川） 新河岸川や石神井川等の上流側の支川
- （ベイエリア） 荒川と隅田川の河口に広がる港湾区域

④ 防災船着場等

（防災船着場）

- ・災害時に避難や救急物資の輸送等のために整備
- ・下流域では平常時利用（一般開放）を一部で実施

（簡易船着場）

- ・小型船舶の乗降のために護岸の一部に設置

（防災船）

- ・都が建造予定の防災船の有効活用（防災訓練、習熟訓練等）



隅田川テラス



荒川河川敷
（緊急用河川敷道路）



水上バス・防災船着場



簡易船着場

水辺の拠点をつなぐネットワーク強化に向けた事業連携イメージ

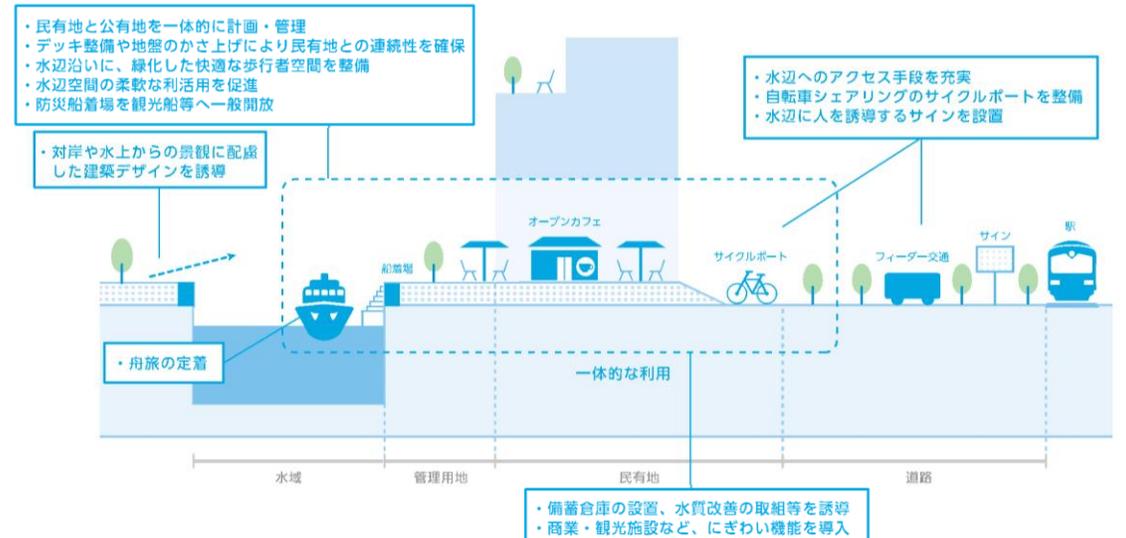
水辺の拠点では、河川整備を進めると同時に沿川地域の特性に合わせた地域交通やシティプロモーション等のそれぞれの自治体ごとのまちづくり事業を連携させることで、水辺と街のつながりを強化していく。それにより、それぞれの水辺の拠点をつなぐ結節機能の強化を目指す。

《水辺の拠点における取組の連携》

連携1：水辺の拠点を中心に「水辺に顔を向けたまちづくり」を展開

連携2：隅田川や荒川等の特徴を活かしたウォーキング等の歩行空間創出や自転車、船等の多様な交通結節機能を強化

連携3：公共・民間それぞれの事業でネットワークを活用



水辺に顔を向けたまちづくりのイメージ
出典 「都市づくりのランドデザイン」平成29（2017）年9月 東京都

(参考) 『未来の隅田川』 将来イメージ

今回の検討に合わせて、隅田川サポーター交流会の拡大企画（2022年度）を全5回にわたり実施し、参加者が描く隅田川の将来像を1枚のイメージとしてまとめた。

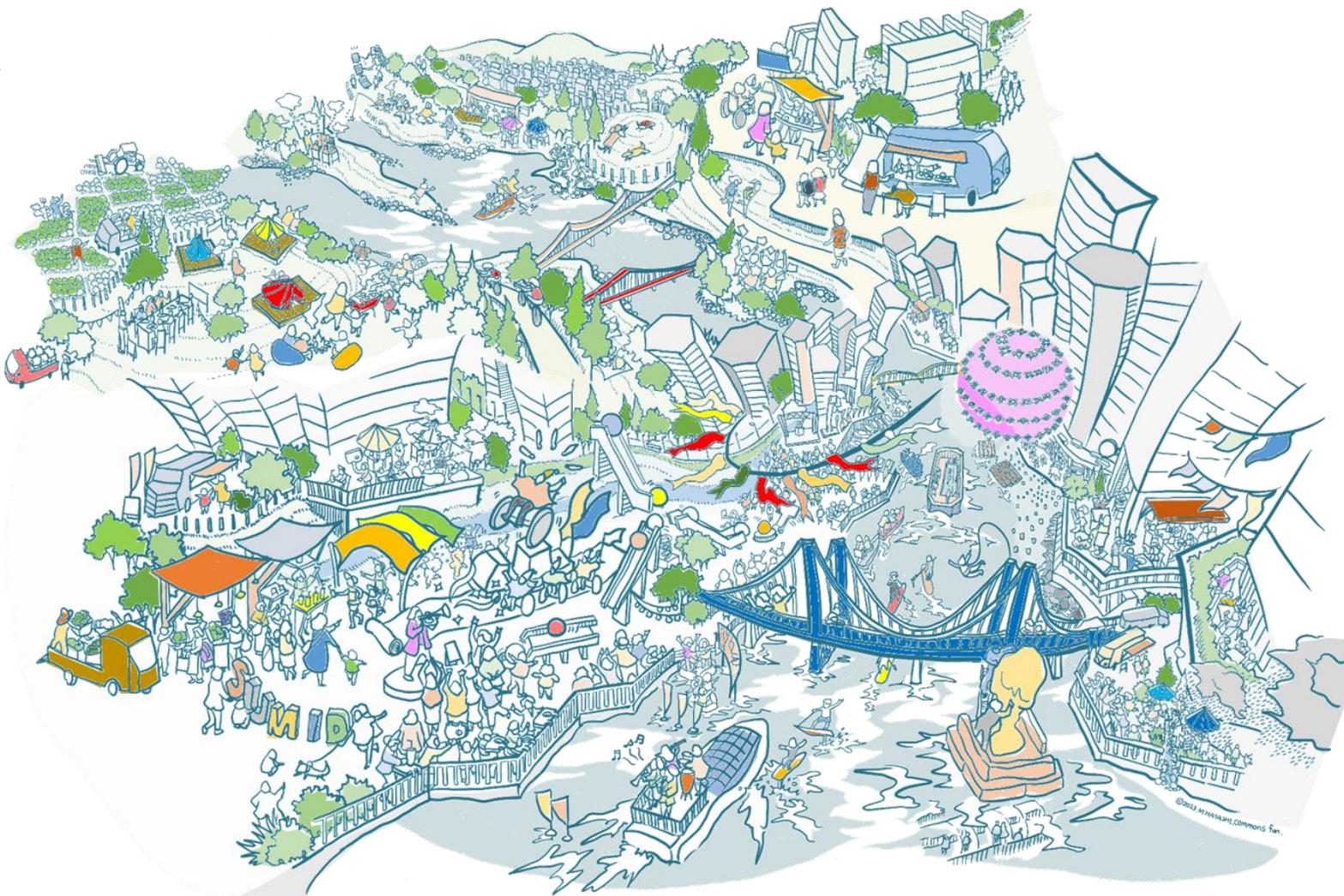
『未来の隅田川』 将来イメージ

水辺をつなぐ 街をつなぐ 人をつなぐ

水辺のオープンスペースが持つ「ゆとり・うるおい・にぎわい」といった可能性を東京の魅力として活かしていくために、『水辺・街・人のネットワーク』を構築していく。

この取組を進めることによって、人々が集う水辺のイベント、水面を眺めるオープンカフェでの食事、川沿いでの心地よいランニング、水と緑にあふれる豊かな住環境、地域を結ぶ舟運などが上下流全体でつながっていく将来像を描く。

隅田川等に関わる多様な主体が同じ方向性を持ちながら進めることで、「未来の東京」に向けた水辺空間を創出していく。



『未来の隅田川』 将来イメージの解説

この未来予想図は、隅田川ポーター交流会を通して利用者の目線からの将来イメージを描いたものである。

隅田川の利活用は多様化してきており、下流を中心に進んできた活動は上流へのつながりに発展しようとしている。

この将来イメージは、そうした機運から、上流と下流が一体となった流域全体のアクティビティのつながりを表現している。

隅田川をサポートしていきたいという想いを概念的に可視化し、隅田川が持つ水辺のポテンシャルの高さが表れている。

「未来の隅田川」での水辺のつながり、街のつながり、人々のつながりは、東京の水辺の大きな魅力となっている。



4. 拠点ごとの取組イメージ

水辺の拠点

岩淵

豊島・新田

尾久・小台

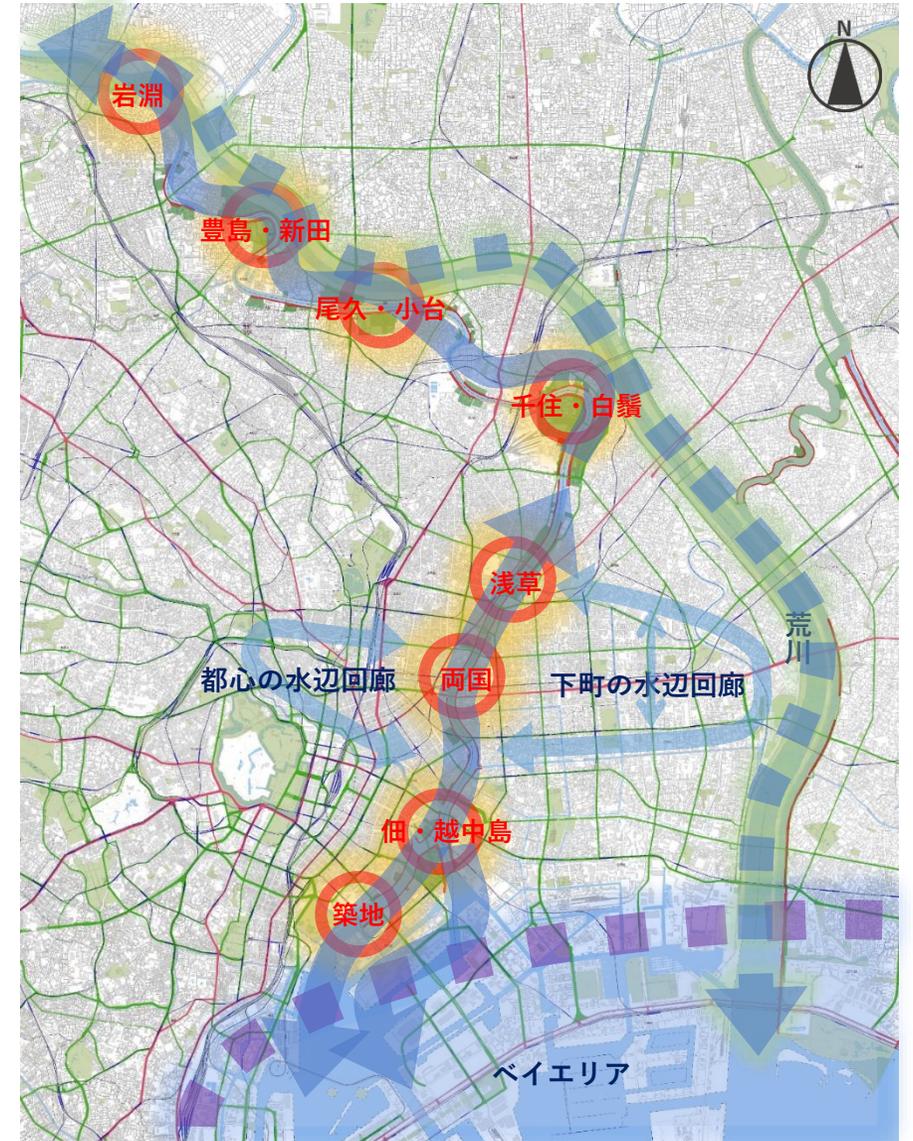
千住・白鬚

浅草

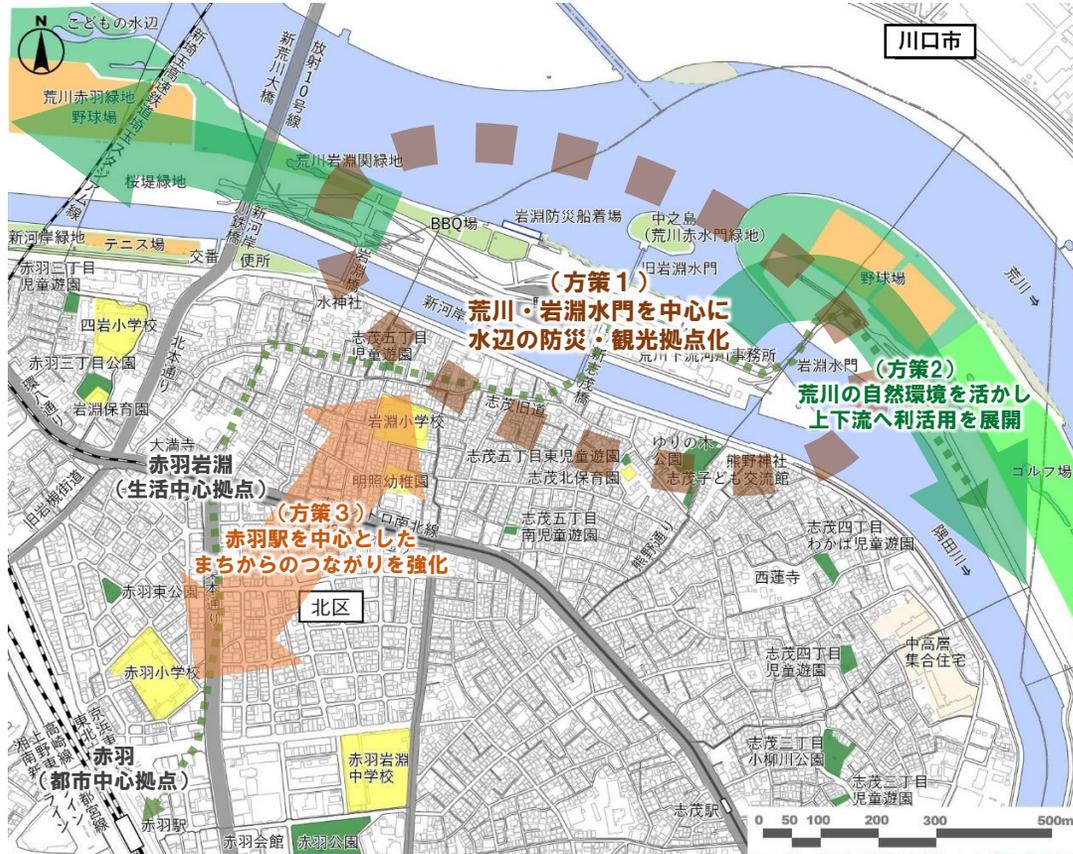
両国

佃・越中島

築地



岩淵エリア 取組イメージ



この地図は、国土地理院長の承認（平29国関公第444号）を得て作成した東京都 地形図（S=1:2,500）を使用（4都市基交第545号）して作成したものである。無断複製を禁ずる。



水辺の防災・観光等の拠点化



自然環境を活かしたアウトドア等の活用

凡例	
	公園・緑地
	防災船着場
	スーパー堤防
	隅田川テラス(通行可能)
	荒川将来像計画2010
	自然地
	干潟(自然地)
	多目的地
	ゴルフ場
	利用施設

《拠点コンセプト》

荒川・隅田川の防災、アウトドア、舟運の交流拠点

《地域特性・課題》

- 荒川、隅田川、新河岸川の合流部で伸びやかな自然環境
- 岩淵水門、防災船着場、荒川知水資料館など防災関連施設の集積
- 沿川における住宅密集、防潮堤による水辺と街の分断
- まちの中心（駅）と水辺が離れてる

《取組方策》

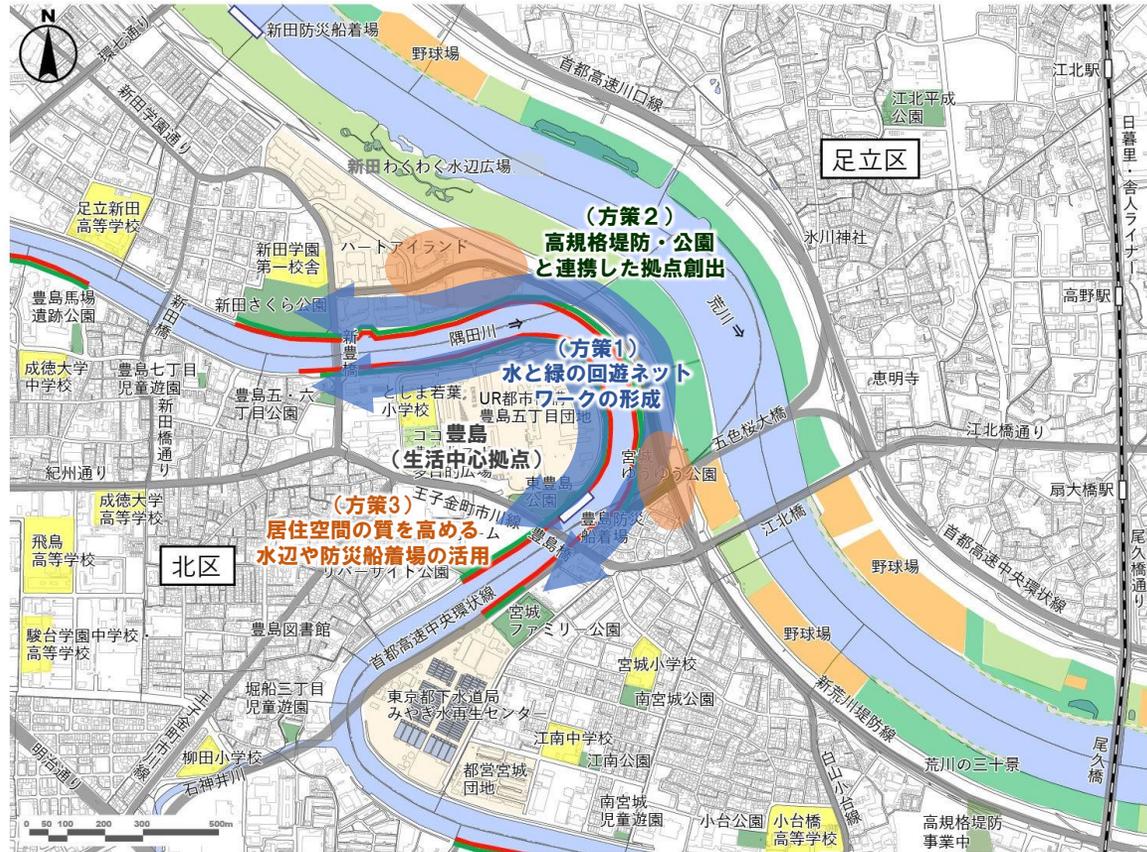
- (方策1) 荒川・岩淵水門を中心に水辺の防災・観光拠点化
- (方策2) 荒川の自然環境を活かし上下流へ利活用を展開
- (方策3) 赤羽駅を中心としたまちからのつながりを強化

《取組連携》

- ・ 広い河川敷でのアウトドアやBBQ等の水辺の活用（ディキャンプ、水上アクティビティ、ドローンなど）
- ・ 岩淵水門、防災船着場、荒川知水資料館等と連携した防災と観光の拠点創出
- ・ 隅田川と荒川の舟運等と連携した防災船着場の活用
- ・ サイクルポート等を併設したオープンカフェの誘致（まちとのネットワーク、サイクル拠点）
- ・ 荒川、隅田川、新河岸川の桜による景観形成 等

※本案は、検討会における一案であり、実現に当たっては、関係機関や地域等との調整を要するものである

豊島・新田エリア 取組イメージ



この地図は、国土地理院長の承認（平29国開公第444号）を得て作成した東京都 地形図（S=1:2,500）を使用（4都市基第545号）して作成したものである。無断複製を禁ずる。



スーパー堤防天端や法面の活用



荒川高規格堤防との連携

凡 例	
	公園・緑地
	防災船着場
	スーパー堤防
	隅田川テラス(通行可能)
	荒川将来像計画2010
	自然地
	干潟(自然地)
	多目的地
	ゴルフ場
	利用施設

《拠点コンセプト》

水と緑を中心とした快適な暮らしとくつろぎの水辺拠点

《地域の特性・課題》

- 隅田川両岸に広がる大規模な団地とマンション群
- スーパー堤防が連担する広大な水辺のオープンスペース
- 新田さくら公園、宮城ゆうゆう公園、新田わくわく水辺広場等の地域資源
- 荒川、隅田川が近接する治水上の要所

《取組方策》

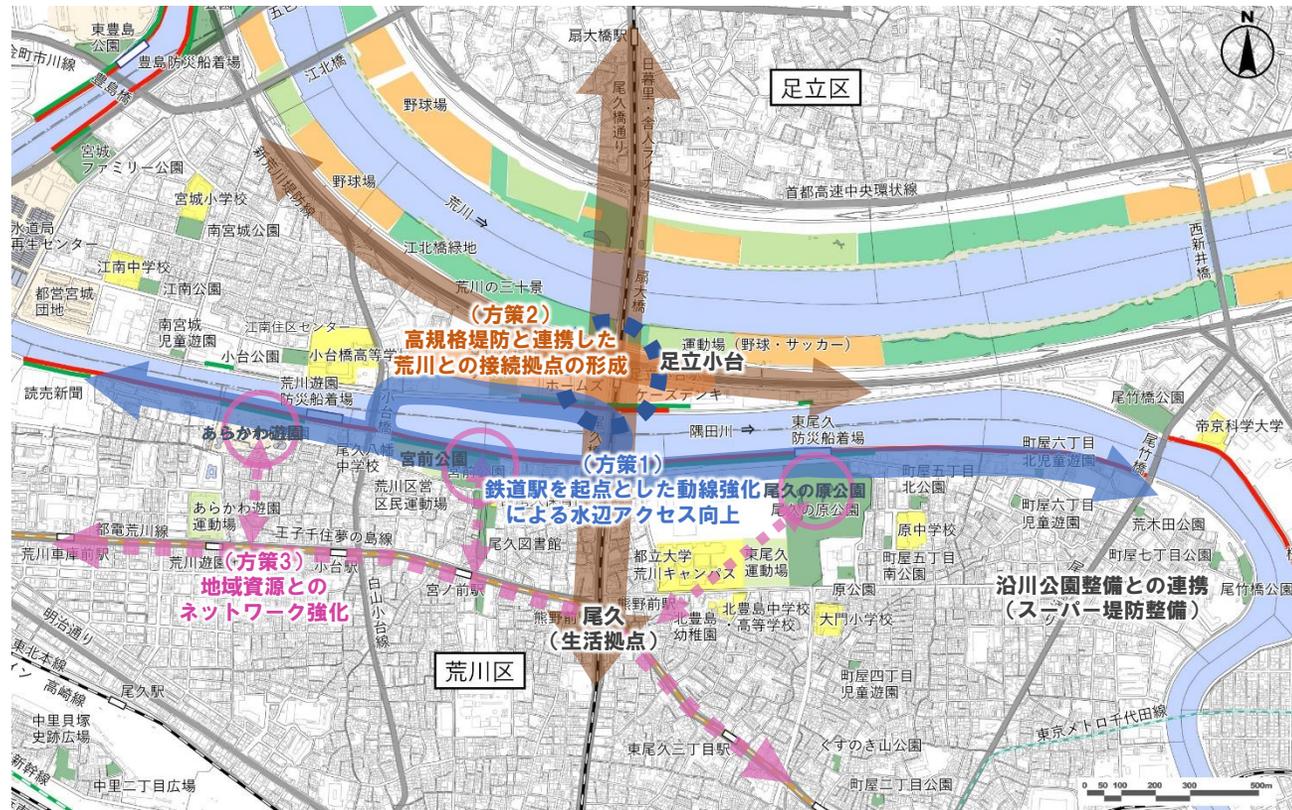
- (方策1) 水と緑の回遊ネットワークの形成
- (方策2) 高規格堤防・公園と連携した拠点創出
- (方策3) 居住空間の質を高める水辺や防災船着場の活用

《取組連携》

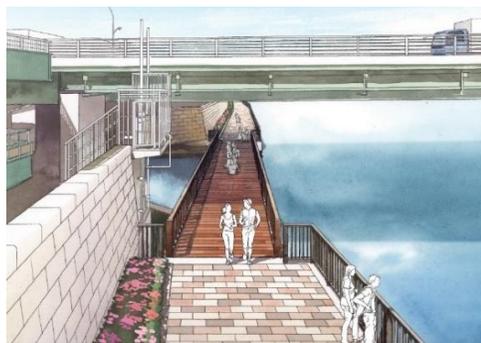
- ・ テラスの動線強化（テラス照明、橋詰スロープ等）
- ・ ウォーカブルデザインの導入（健康増進サイン、ベンチや日陰等の居心地がよい空間づくり）
- ・ まちづくりと連携したスーパー堤防天端や法面活用
- ・ キッチンカー等のイベント広場としての水辺空間活用
- ・ 荒川河川敷の自転車利用と連携するサイクルポートの設置
- ・ 荒川高規格堤防との連携や防災船着場の活用 等

※本案は、検討会における一案であり、実現に当たっては、関係機関や地域等との調整を要するものである

尾久・小台エリア 取組イメージ



この地図は、国土院院長の承認(平29国関公第44号)を得て作成した東京都 地形図 (S=1:2,500) を使用 (4 都市基交第545号) して作成したものである。無断複製を禁ずる。



テラスの動線強化



スーパー堤防・高規格堤防と連携した拠点形成

凡例	
	公園・緑地
	防災船着場
	スーパー堤防
	隅田川テラス(通行可能)
	荒川将来像計画2010
	自然地
	干潟(自然地)
	多目的地
	ゴルフ場
	利用施設

《拠点コンセプト》

まち・公園・交通をつなぐ水辺の接続拠点

《地域の特性・課題》

- 鉄道、道路、河川の結節点
- 隅田川テラス、高規格堤防、スーパー堤防が事業中
- あらかわ遊園、尾久の原公園、宮前公園等の地域資源

《取組方策》

- (方策1) 鉄道駅を起点とした動線強化による水辺アクセス向上
- (方策2) 高規格堤防と連携した荒川との接続拠点の形成
- (方策3) 地域資源とのネットワーク強化

《取組連携》

- ・ テラスの動線強化 (テラス照明、橋詰スロープ、尾久橋等)
- ・ スーパー堤防と高規格堤防が連携した事業推進 (修景デザインの一体化、階段やスロープ、防災拠点の創出等)
- ・ 荒川高規格堤防と連携した水辺の交通機能向上 (サイクルポート、堤防道路と接続した交通アクセスの向上等)
- ・ 公園等の地域資源におけるまちと水辺のアクセス強化 (テラス案内、ウォーキング、ランニング等のサイン)
- ・ あらかわ遊園と他エリアの舟運連携 等

※本案は、検討会における一案であり、実現に当たっては、関係機関や地域等との調整を要するものである

千住・白鬚エリア 取組イメージ



この地図は、国土地理院長の承認（平29国関公第444号）を得て作成した東京都 地形図（S=1:2,500）を使用（4都市基交第545号）して作成したものである。無断複製を禁ずる。



公園・スーパー堤防と連携した拠点化



隅田川テラス照明の設置

凡例	
■	公園・緑地
■	防災船着場
■	スーパー堤防
■	隅田川テラス(通行可能)
◆	荒川将来像計画2010
■	自然地
■	干潟(自然地)
■	多目的地
■	ゴルフ場
■	利用施設

《拠点コンセプト》

大規模な公園と舟運による
防災・レクリエーションの隅田川の中核拠点

《地域の特性・課題》

- 汐入公園、東白鬚公園等の地域の防災拠点が集積
- スーパー堤防が連担し、伸びやかな水と緑が広がる
- 沿川開発や公園整備と連携したスーパー堤防
(千住大橋地区開発や天王公園整備等の事業予定)
- 隅田川と荒川のアクセスとなる旧綾瀬川
- ウォーキング等の健康利用が増えている

《取組方策》

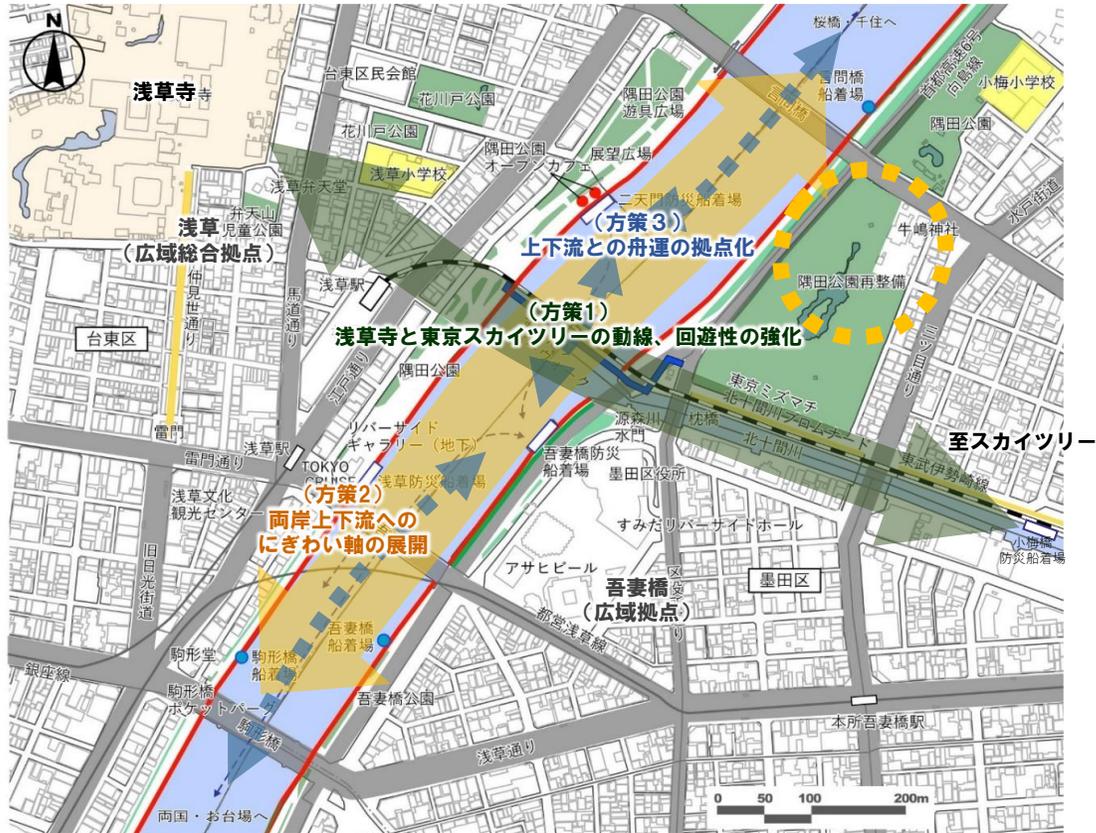
- (方策1) 汐入公園を中心とした水辺拠点（公園・舟運）
- (方策2) 鉄道駅（南千住、千住関屋、鐘ヶ淵）からの動線強化
- (方策3) 水辺の軸を上下流へ展開

《取組連携》

- ・ テラスの動線強化（照明、橋詰スロープ、白鬚橋等）
- ・ 公園やスーパー堤防と連携した拠点化
(オープンカフェ、マルシェ等のイベント広場、船着場活用)
- ・ 舟運関連施設の活用/沿川再開発との連携
(緊急物資の輸送拠点等の防災機能の強化)
- ・ ウォーキングコース（案内サイン、避難誘導サイン）の設定、
サイクルポートの設置 等

※本案は、検討会における一案であり、実現に当たっては、関係機関や地域等との調整を要するものである

浅草エリア 取組イメージ



この地図は、国土地理院長の承認（平29国関公第444号）を得て作成した東京都 地形図（S=1:2,500）を使用（4都市基交第545号）して作成したものである。無断複製を禁ずる。



まちづくりと連携した舟運拠点



沿川公園との一体整備・活用

凡例	
	公園・緑地
	防災船着場
	スーパー堤防
	隅田川テラス(通行可能)

《拠点コンセプト》

浅草・東京スカイツリーを結ぶ にぎわいの水辺

《地域の特性・課題》

- 浅草寺、東京スカイツリー等の観光資源が集積
- 両岸に隅田公園があり、水辺と緑を合わせ持つにぎわい拠点
- 防災船着場が集積し、観光舟運の拠点
- 隅田公園オープンカフェ、東京ミズマチ等の水辺活用が進展

《取組方策》

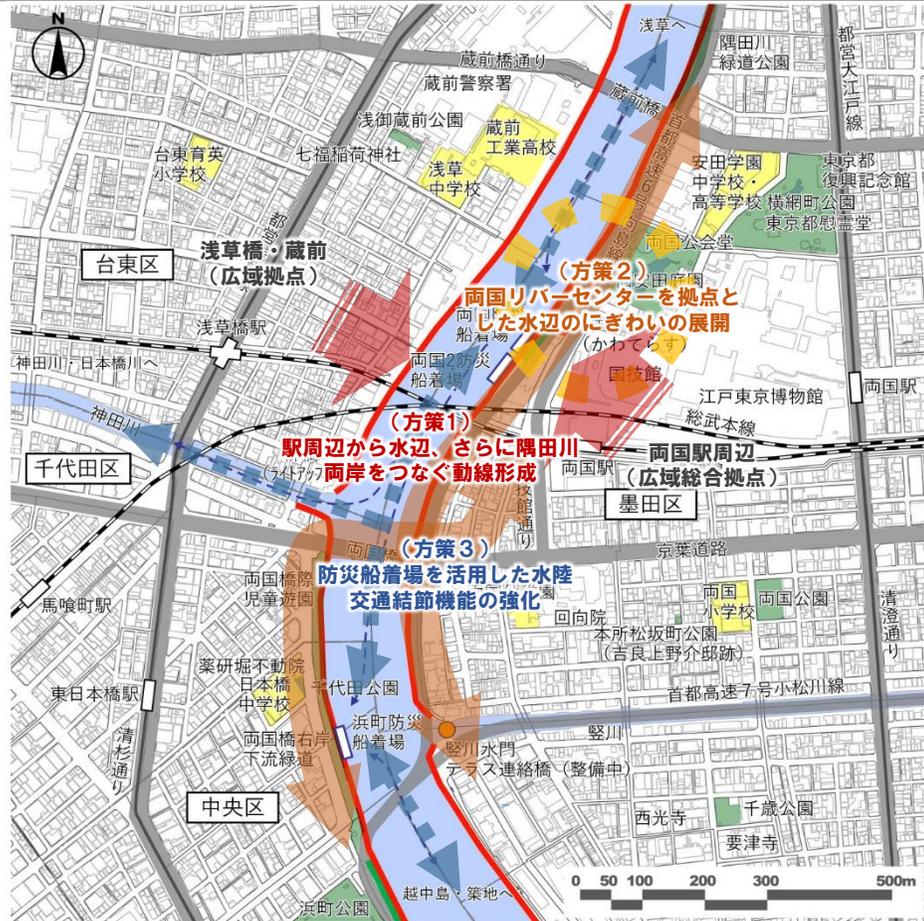
- (方策1) 浅草寺と東京スカイツリーの動線、回遊性の強化
- (方策2) 両岸上下流へのにぎわい軸の展開
- (方策3) 上下流との舟運の拠点化

《取組連携》

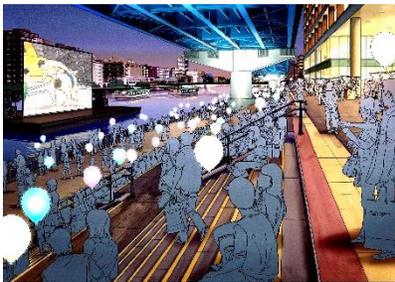
- ・ 隅田公園と水辺空間の一体的な整備、活用
(スーパー堤防整備、オープンカフェ・隅田公園再整備との連携)
- ・ テラスの動線強化の拡充（源森川水門、吾妻橋）
- ・ オープンカフェ、かわてらす®の誘致
- ・ 防災船着場のイベント等での活用促進 等

※本案は、検討会における一案であり、実現に当たっては、関係機関や地域等との調整を要するものである

両国エリア 取組イメージ



この地図は、国土地理院長の承認（平29国関第444号）を得て作成した東京都 地形図（S=1:2,500）を使用（4都市基交第545号）して作成したものである。無断複製を禁ずる。



水辺拠点施設と連携したイベント



沿川開発と連携したスーパー堤防

凡例	
	公園・緑地
	防災船着場
	スーパー堤防
	隅田川テラス(通行可能)

《拠点コンセプト》

歴史・文化が息づく「水の都」東京の顔

《地域の特性・課題》

- 歴史・文化施設の集積／鉄道・道路結節拠点
- 両国リバーセンター等の舟運結節拠点（隅田川⇄神田川）
- 沿川の観光まちづくりや開発との連携

《取組方策》

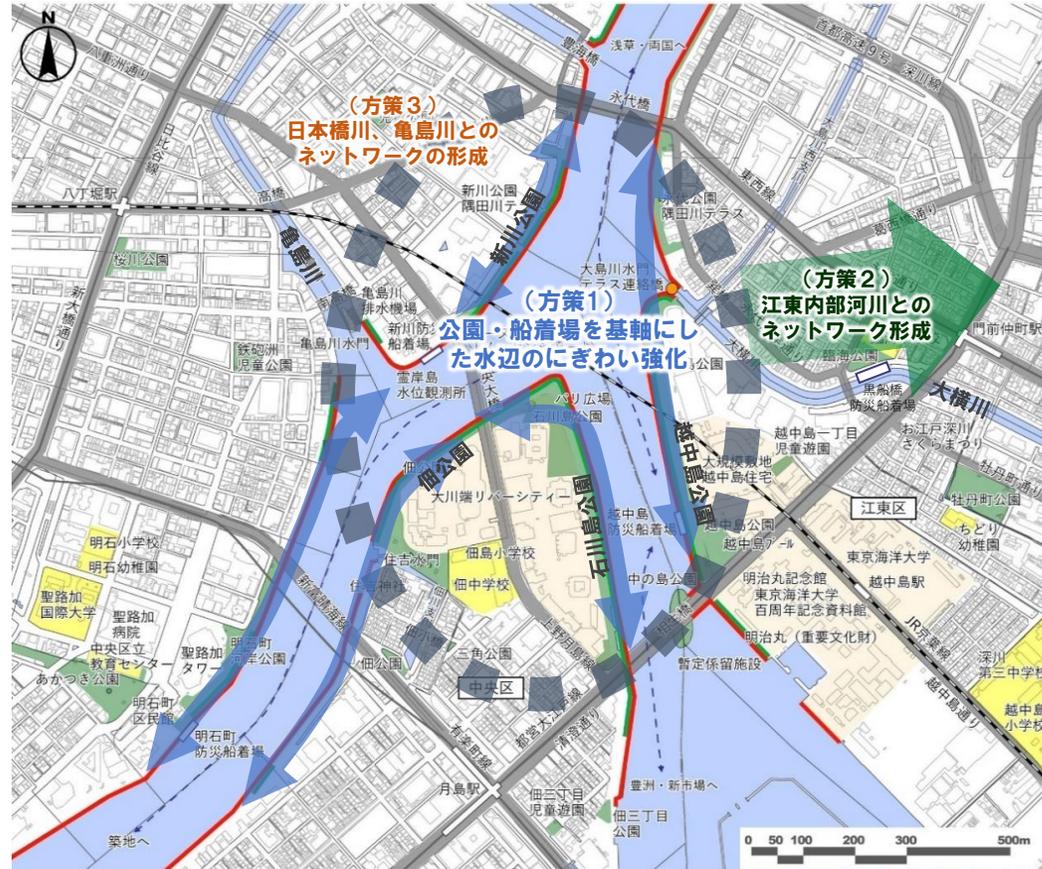
- （方策1） 駅周辺から水辺、さらに隅田川兩岸をつなぐ動線形成
- （方策2） 両国リバーセンターを拠点とした水辺のにぎわいの展開
- （方策3） 防災船着場を活用した水陸交通結節機能の強化

《取組連携》

- ・ 駅からの動線強化とテラスの動線強化の拡充（まちづくりとの連携、神田川合流部のテラスへのアクセス確保）
- ・ 沿川開発と連携したスーパー堤防整備
- ・ リバーセンター大階段等のイベント広場としての活用（恒常的な水辺利活用への仕組みづくり）
- ・ 観光地を結ぶ舟運ルートの設定、浜町防災船着場・待合施設の活用
- ・ 高架下空間の活用 等

※本案は、検討会における一案であり、実現に当たっては、関係機関や地域等との調整を要するものである

佃・越中島エリア 取組イメージ



この地図は、国土地理院長の承認（平29国開公第444号）を得て作成した東京都 地形図（S=1:2,500）を使用（4都市基交第545号）して作成したものである。無断複製を禁ずる。



河川水面を活用したにぎわいの創出



待合施設の活用やイベント広場

凡 例	
■	公園・緑地
	防災船着場
	スーパー堤防
	隅田川テラス(通行可能)

《拠点コンセプト》

開放的な河川景観が広がる 洗練された水辺都市

《地域の特性・課題》

- 隅田川の分流点であり、開放的なオープンスペースや高層マンション、中央大橋等から洗練された都市空間の景観を形成
- スーパー堤防が連担し、桜が続く伸びやかな空間
- ベイエリア（豊洲）からの玄関口
- 日本橋川、亀島川、江東内部河川等との接続

《取組方策》

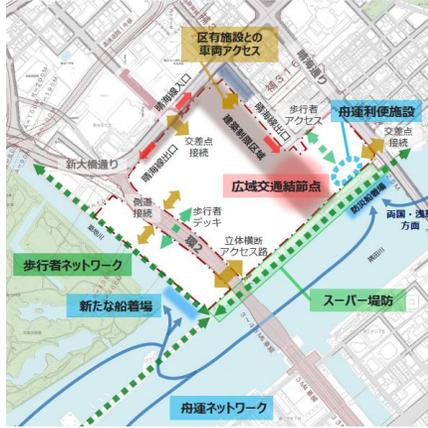
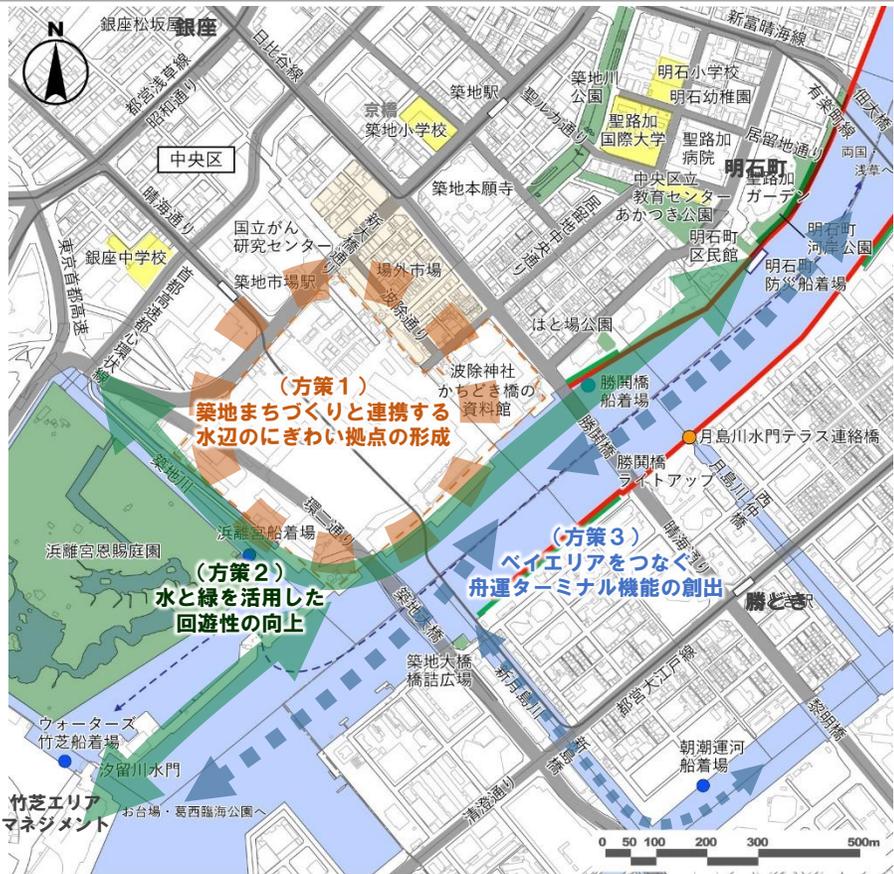
- (方策1) 公園・船着場を基軸にした水辺のにぎわい強化
- (方策2) 江東内部河川とのネットワーク形成
- (方策3) 日本橋川・亀島川とのネットワークの形成

《取組連携》

- ・越中島公園における待合施設の活用やマルシェ・キッチンカー等による隅田川テラスの活用促進
- ・永代橋~相生橋~中央大橋の河川水面や隅田川テラスの利活用
- ・隅田川係留所（新川）の活用
- ・テラスの動線強化の拡充（亀島川水門、住吉水門）
- ・沿川開発と連携したスーパー堤防整備 等

※本案は、検討会における一案であり、実現に当たっては、関係機関や地域等との調整を要するものである

築地エリア 取組イメージ



出典：築地地区まちづくり事業実施方針（令和4年3月）

この地図は、国土地理院長の承認（平29国関公第444号）を得て作成した東京都 地形図（S=1:2,500）を使用（4都市基交第545号）して作成したものである。無断複製を禁ずる。



築地まちづくりと連携したスーパー堤防、防災船着場

凡例	
■	公園・緑地
	防災船着場
	スーパー堤防
	隅田川テラス(通行可能)

《拠点コンセプト》

海・川・街を接続する 隅田川の玄関口

《地域の特性・課題》

- バイエリアからの玄関口、東京ベイeSGまちづくり※1との連携
- 銀座・勝どき等と近接し、まちづくりの高いポテンシャル
- 築地地区まちづくり事業※2（築地市場の跡地利用）との連携
- 明石町（聖路加）、浜離宮・竹芝等の沿川地域資源
- 道路、鉄道、舟運の複数の交通結節機能

※1 2040年代のベイエリアを実現するための実行戦略
 ※2 築地まちづくりは、築地地区まちづくり事業事業者募集要項（令和4年11月）に基づき、民間事業者からの提案を受けて進められるものである

《取組方策》

- （方策1）築地まちづくりと連携する水辺のにぎわい拠点の形成
- （方策2）水と緑を活用した回遊性の向上
- （方策3）ベイエリアをつなぐ舟運ターミナル機能の創出

《取組連携》

- ・ 築地まちづくりと連携したスーパー堤防と防災船着場整備
- ・ 水辺空間のオープン化促進（オープンカフェの誘致やマルシェ、キッチンカー等のにぎわいイベント広場等）
- ・ 街と一体となった水辺の利活用が行われる水と緑のプロムナードの創出（隅田川、築地川、築地～竹芝防潮堤の回遊性向上）
- ・ 船着場との一体的で効果的な活用を図る交通結節機能の創出（防災船着場活用、舟運利便施設、公共交通との接続等の多様な交通との連携）等

※本案は、検討会における一案であり、実現に当たっては、関係機関や地域等との調整を要するものである

第4章

今後の展開に向けて

1. 今後の展開に向けた考え方

- (1) 具体的な計画の検討
- (2) 段階的な発展
- (3) 水辺のエリアマネジメントによる利活用の推進
- (4) 地域の個性を活かした水辺空間の創出
- (5) 水辺の整備と利活用による地域防災力の向上

2. 段階的な発展に向けての取組

PDCAサイクルによる事業の改善・発展

第4章の概要

- 本検討における「あり方」の実現に向け、関係機関の調整を図り、**各主体における具体的な計画**を検討する必要がある。
- 水辺空間の基盤となるテラスやスーパー堤防等の整備を引き続き進めていくことに加え、照明やスロープ等の**動線強化の展開**を検討し、**まちづくりとの連携**を進めていくことが重要である。
- 今回設定した「水辺の拠点」ごとのまちづくりビジョンや都市再生プロジェクト等との連携を模索しながら、地域のタイミングに応じて**プロジェクトを育てていく視点**も重要である。
- 前回の「あり方」から概ね10年のサイクルで次の展開時期となったことを鑑み、**次の10年を目標**に今回の「あり方」による取組を展開していくことが考えられる。
- そのために、PDCAサイクルによる「取組の質向上」「関係者の連携」「取組範囲の拡がり」の**段階的な発展**を目指す。
- 隅田川等を中心に「ゆとり・うるおい・にぎわい」にあふれる水辺空間を創出し、「未来の東京」に向けた**水辺整備のロールモデル**としていくことが望まれる。

1. 今後の展開に向けた考え方

(1) 具体的な計画の検討

- 本検討における「あり方」の実現に向け、関係機関が調整を図り、**各主体の事業計画や取組**等を検討していく必要がある。
- 河川事業としては、**テラスやスーパー堤防等の整備**を引き続き進め、**照明やスロープ等の動線強化**の拡充・展開、**ウォークブルな水辺空間の創出**に向けた検討を行うことが重要である。
- 水辺と街が一体となった「水辺の拠点」の創出には、**沿川自治体が主体的に行うまちづくりの計画や取組、開発や舟運等の民間事業、地域住民による利活用等**と連携していくことが不可欠である。

隅田川等における未来に向けた水辺整備のあり方

『水辺のゆとりと潤いを活かした東京の顔づくり』
～水辺のゆとり・うるおい・にぎわいをつなぐ～

関係者がそれぞれの主体的な取組にフィードバック

水辺を基軸としたネットワークの構築

《国・都・区等の行政の取組》
河川・道路・公園・都市・観光 等

《地域・民間事業者等の取組》
開発・舟運・鉄道・飲食・研究 等

《水辺を利活用する市民等の取組》
ボランティア・アート・マルシェ 等

「未来の東京」に
向けた水辺整備の
モデルケース

(2) 段階的な発展

- これまでの事業サイクルから、概ね10年で次の展開へと移ることを視野に入れ、取組を**段階的に発展**させていくことを目指す。

水辺のゆとりと潤いがあふれる未来の東京へ

これまでの10年

- 「人々が集い、にぎわいが生まれる水辺空間の創出」
- 隅田川下流域を中心とした事業展開
 - 水辺の動線強化、官民連携事業等の導入

これからの10年

- 「水辺のゆとりと潤いを活かした東京の顔づくり」
- 水辺のオープンスペースの更なる利活用推進
 - 隅田川の下流域の拡充、上流域への展開
 - 多摩地域の河川等への試行や検討



未来の東京へ

- 「隅田川をロールモデルとした東京全体への展開」
- 隅田川等の水辺整備のさらなる発展・成熟
 - 他流域も含めた東京の水辺全体への展開

1. 今後の展開に向けた考え方

(3) 水辺のエリアマネジメントによる利活用の推進

- 恒常的な利活用を推進するためには、中間支援組織等が行う水辺のエリアマネジメントの導入に向けた検討を引き続き進めていくことが必要である。
- 水辺空間の利活用にあたっては、河川・公園等の管理者との調整や地域の合意形成を行うための協議会の運営が必要であるほか、河川還元手法や事業性確保等に向けたスキームづくりが課題である。
- 他都市では、水辺の利活用において多様なスキームを構築しており、こうした事例では社会実験等の試行を通して地域の特性に応じた仕組みづくりを行っている。
- 隅田川においても、まずは地域や事業者のニーズがあるエリアをモデルとしてイベント広場等による特例占用に向けた検討や調整を進め、地域の特性に合わせたスキームの構築を行うことが必要となる。
- 複数の地域でこうした取組を進め、将来的には広域的な連携の仕組みへのステップアップを検討していくことが重要である。

他都市での中間支援組織によるイベント広場等の事例



とんぼりリバーウォーク（道頓堀川）



納屋橋地区（堀川）

(4) 地域の個性を活かした水辺空間の創出

- 水辺の拠点整備や活用を行っていく中で、地域の歴史やストーリー性に配慮していくことが重要である。地域と連携した利活用を進めることで地域の個性を活かした水辺空間の創出に繋がる。
- 地域を盛り上げ、利活用を進めるカギとなる団体や人づくりも重要であり、隅田川サポーター制度を活用した情報発信や交流の場を創出する等の取組を上下流で展開していくことが望ましい。
- 地域が主体となった取組を支援するためにも、国による「かわまちづくり」支援制度の活用等を視野に入れた取組を推進し、まちづくりと一体となった魅力ある水辺空間の創出を目指す。

(5) 水辺の整備と利活用による地域防災力の向上

- 水辺の拠点として河川整備やまちづくりと連携した水辺の利活用を推進することは、基盤整備によるハードとしての防災機能の強化とソフトとしての防災意識の向上に繋がる。
- スーパー堤防等の河川整備に加え、防災船着場の活用、利活用の仕組みづくり等の隅田川に関わる多様な取組を進めることで安全と魅力の両面から水辺空間の活用を進めていく。

2. 段階的な発展に向けての取組

PDCAサイクルによる事業の改善・発展

- 隅田川等における水辺整備を段階的に発展させるためには、PDCAサイクルにより『取組の質向上』『関係者の連携』『取組範囲の拡がり』等の視点から、取組内容を改善し、発展させることが重要である。
- そのための取組の効果検証として、利用状況の把握による評価に加え、健康増進や経済効果等の新たな視点を加えた評価指標の検討も重要である。

Plan

- 方向性（あり方）の提示・共有
- 国・都・区等の事業計画や民間事業等の取組企画 等

Do

- テラスやスーパー堤防、照明・スロープ等の河川整備
- まちづくり等の地元自治体の事業や沿川民間開発
- 舟運やイベント、ボランティア活動等の水辺空間の利活用 等

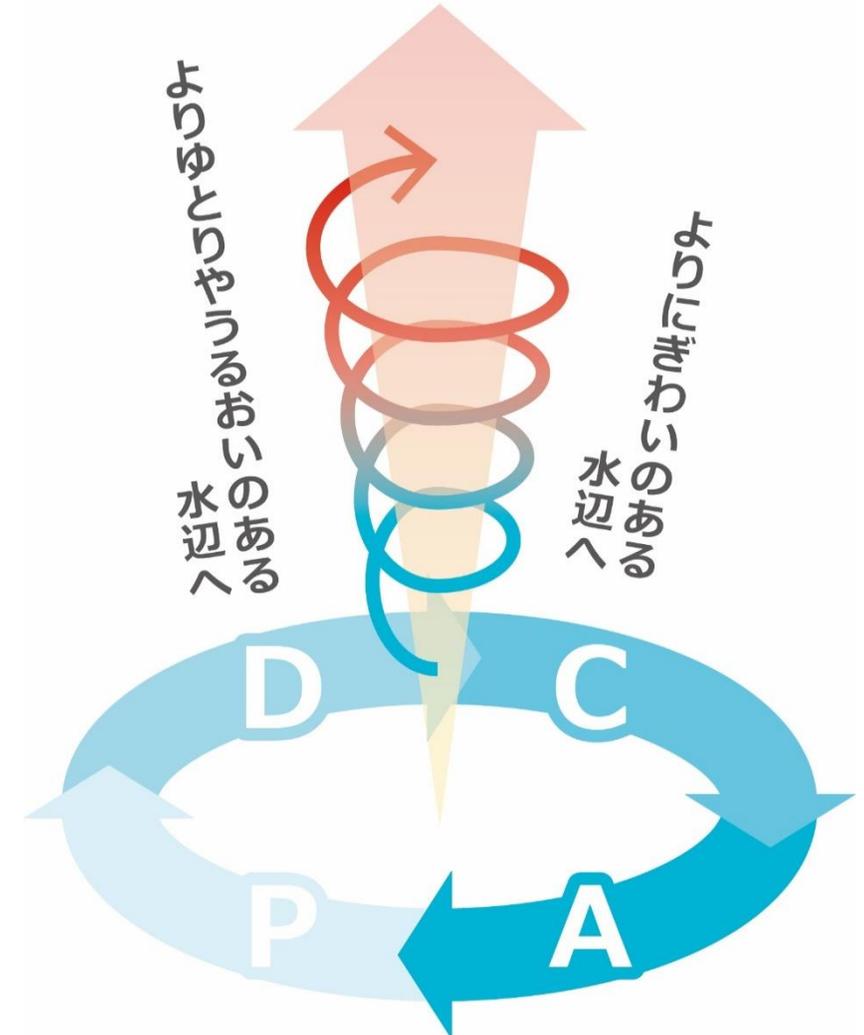
Check

- 水辺整備による効果の把握と事業評価
（水辺利用者の実態把握、健康増進や経済効果等の把握など）
- 次の展開や対応策の検討

Act

《持続的な取組に向けてさらなる改善》
取組の質向上／関係者の連携／取組範囲の拡がり

スパイラルアップ



PDCAサイクルによる段階的な発展